
破滅勇者 ディバイガン

マルスマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

破滅勇者 デイバイガン

【Nコード】

N5705B

【作者名】

マルスマン

【あらすじ】

宇宙……。広い宇宙に突如現れた極悪宗教組織バッダーズ。彼らの目的は宇宙を一度破滅させ、新たな宇宙を作る事、その野望を打ち砕くため全宇宙の平和を守る宇宙連合は破滅勇者隊を結成。そして、地球で少年天下勝は、破滅勇者隊隊員デイバンと出会い、壮絶な戦いへ巻き込まれる。これは、少年達と超AIロボットたちの友情と戦いの物語である！

第1話 破滅勇者の生誕 - 01 (前書き)

どうも、マルスマンです。

1990年代を代表するロボットアニメと言えば

勇者シリーズと、エルドランシリーズですね……。

僕は勇者シリーズが好きなので、こっちの方で書かせていただきます。

ちなみにガオガイガーみたいでなく、マイトガインなどの、乗り物から変形するタイプにするつもりです。

文章力は低いですがお願いします。

第1話 破滅勇者の生誕 - 01

「聞こえるか・・・・・・・・少年よ・・・・・・・・」

（何だ・・・・・・・・。）薄れる意識の中そんな声がした。

「少年よ・・・・・・・・。勇気に選ばれし破滅の勇者よ・・・・・・」

（勇気・・・・・・・・？破滅の勇者・・・・・・・・？俺のことなのか・・・・・・・・？）

「頼む・・・・・・・・。地球を守ってくれ。もう君の仲間たちは君の目覚めを待っただけだ・・・・。」

（仲間・・・・・・・・。）

「もう時間がない！・・・・・・・・頼んだぞ勇者よ！」その声はだんだん薄れていった。

（・・・・・・・・待つてよ！！！！ねえ・・・・・・・・。待つてよ！！！！）

「待つてよ！！！！あれ？」勝（う）が起きると、そこは自分の部屋であつた。

「・・・・・・・・夢なのか？・・・・・・・・」

勝は不思議に思いながらも星マークが散らばっている寝巻きを脱ぎ、私服に着替えた。

「・・・・・・・・変な夢だったな・・・・・・・・」

勝はランドセルに必要なものをいれ、下のリビングへ向かった。

「おはよう」母の美紀子^{みきこ}が笑顔でキッチンから言ってきた。

「おきたか、勝」と言い、兄の勇^{ゆう}が勝の頭をくしゃくしゃにした。

「兄ちゃん！！」勝は怒るが、勇は、もう家を出ていたので、口を膨らませながら椅子に座った。

「さ、あなたも早く準備して、学校行きなさい」

美紀子は、焼いた食パンを机において、勝にそう言った。

勝は、パパッと、食べて、すぐ家を出た。

勝の通う池野神小学校^{いけのがみ}は勝の家から歩いて約10分くらいである。

「・・・・・・・・なんだったんだろうあの夢は・・・・・・・・？」

勝は、今朝の夢がまだ気がかりになっていた。

勝がぶつぶつ言っていると、思いつき後ろから背中を押され、勝は躓いた^{つまず}。

「いてて・・・・・・・・・・紀香か・・・・・・・・・・」

勝は不機嫌そうに、少女の顔を見つめた。

少女は、黒に少し茶髪かったセミロングの少女で、顔立ちはまるでフランス人形のような、美少女だった。

「朝っぱらから何ぶつぶつ言ってるのよ」

彼女は勝の幼馴染の藤井^{ふじい} 紀香^{のりか}である。

「うるさいな・・・・・・・・関係ないだろう！」

勝は紀香にそう言い放ち早歩きで学校へ向かった。

「ちえつ。つまんないの〜」とニヤニヤしながら紀香は言い学校へ向かった。

数分して勝は小学校に着いた。階段を上がって行き、6 - 1の教室へ着いた。

「いよう！勝！！」

教室にはいると同時に、親友の赤木浩次が挨拶をしてくれた。

この赤城は、有名な大企業赤城コーポレーションの会長の息子であって、勝の一番の理解者である。

「やあ・・・・・・・・赤城」

勝は元気がない挨拶をして、ランドセルを机の上に置き椅子に座って、考え事を始めた。

「どうした？何かあったのか？」

赤城が、不安そうに勝に聞いた。

「いや、ちょっとね……………」と言い、窓の方を見つめた。

（勝の様子がおかしい?!）この事に赤城はかなり困った。

（失恋……………?……………有り得る!!）と赤木は勝手に結論付けてしまった。

「勝よ、そんな事な、人生でいっぱい経験するんだ」

赤城は語るように話し始めた。

「……………」

勝は、赤城の言いたいことがさっぱりわからなかった。

「たとえ一度のことで、落ち込んでじゃ、人生やってけないぜ……………」

「そうなの……………」

勝は、苦笑いをした。

「ああ。よし！今日さ、放課後気分転換にでも学校の裏山でも探検しようぜー!!」

笑顔で言う赤城に

「……ああいいね。行こうか。」と勝は、一応笑顔で言った。

数時間が過ぎ最後の授業の国語が終わった。

「やっと一日終わった」

あちこちで生徒がいろいろと、愚痴を言っている。

そして、帰りのホームルームが終わって、赤城、勝の二人は、裏山に向かった。

歩いている途中、赤木が話しかけてきた。

「なあ、勝、知っているか？あの裏山の噂の事」

赤城が質問をしてきた。

「え………？何かあんの？」

勝はまったく知らなかったので、興味を持った。

「実はな、あの裏山に昔宇宙からあの山に二つの光る玉が落っこち

たらしいんだ。」

「光る玉？」

勝は眉間にしわを寄せ聞いた。

「ああ、確か赤色と、青色の玉らしいんだ……」

「へえ」

「よし決めた！」

急に赤城が大声を出した。

「な……なにを？」

勝が不安そうに聞く。

「その玉搜そうぜ！！」

赤城が満面の笑顔で言う。

「え……」

勝は戸惑った。

「拒否権なし！行くっぞ」

赤城は問答無用に決め、右手を上突き出しながら歩く速度を上げた。

（あるか本当にわかんないのに大丈夫かな・・・・・・・・・・。）

勝は不安になった。

続く

第1話 破滅勇者の生誕 - 02

もう30分は経過しただろうか。勝と赤城は延々と続くような山道をひたすら歩いていた。

「うおゝなげえ〜！」

額に大粒の汗を流している赤城は、ポケットから赤いハンカチを出し、汗を拭いつつ、歩いていた。

「赤城……俺もう疲れたって……………」

勝はクタクタになりながら言う。

「いいか、こんな時こそ気合だ！」

赤城は親指を立ててGOODのサインをし笑顔で、勝に言った。

（ハハハハ……………もういいや）勝はなるがままに歩くことにした。

数十分し裏山の頂上につくことができた。

「はあゝ。着いた……………」

勝は完全に疲れきって頂上にあるベンチに腰をかけた。

「勝！何座ってんだよ！玉搜すぞー！！」

ぜんぜん元気な赤城はそう言った。

「え・・・・・・・・。マジ？」

困ったように勝は言い、嫌そうにベンチから腰を上げ、赤城の元へ向かった。

頂上のフェンスを二人は乗り越え樹海へ入った。

「おい・・・・・・・・入って大丈夫？」

勝は不安そうに辺りを見ながら言う。

「大丈夫だつて！天下の赤城コーポレーション様が造ったこのUG
イビエス
PSさえありや問題ないって！」

赤城はそういつて、ポケットからUGPSを取り出し誇らしげに言った。

「あつそう・・・・・・・・。」

勝はなんともやりきれない気持ちになった。

二人が樹海を歩いていくと、ある古そうな小さい建物を見つけた。

「なんだ？あれ？」

いち早く気づいたのは赤城であつた。

「さあ・・・・・・・・？」

勝はそんな事よりも早く帰りたいと言つ気持ちのほうが強かった。

「いくつきゃないな」

「へ？」

勝は赤城の言葉に戸惑う。

「あゝ！行くだよあの小屋に！！俺について来い！！！！」

赤城は強引に勝を連れて行つた。

その小屋はそこまでも大きくなくよく学校とかで見る倉庫ぐらいの大きさのものだった。

二人は、赤城が持っていたコンパクトライトの光を頼りに夕方なのに深夜のような暗さの小屋の中の探検を始めた。

二人がしばらく歩いていくと、変な扉の前に着いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
『コノ先勇氣アルモノノミ入ルベシ。』
「・・・・・・・・なんじゃこりゃ？」

赤城が読み上げた言葉は、扉の目に張られていた紙に書いてあった事である。

「勇氣・・・・・・・・・・」

勝は今朝の夢のことを思い出した。

勝は、少し沈黙に陥った。

「勝！ここあんまおもしろそうじゃないし、時間も時間出し帰ろうぜ・・・・・・・・勝？」

沈黙している勝を見つめ、赤城は心配そうに顔を見た。

「俺、この扉の中は言ってみようかな？」

急に発言した勝に赤城は驚いた。

「え?!入んのここに？」

赤城は驚いたように勝を見る。

「うん。ちょっとね・・・・・・・・気になる事があるからさ・・・・・・・・」

勝はそう言いドアノブに手を差し出した。

キィという乾いた音と共に扉はゆっくり開いた。

扉を開けた先は、地下に続く階段があった。

「階段？」

赤城は下のほうを覗くが、暗くて全く見えなかった。

勝はそんな赤城を無視して、無言で階段を下りていった。

「おい待てよ!!」

赤城は慌てて勝についていった。

コンパクトライトの光でやっと2、3段くらいの段差が見える階段を下りていく二人。

突然勝の頭に頭痛がした。

「う……………!!」

勝はその場に座り込んだ。

「どうした？」

赤城は心配して、傍に寄り添った。

「いや……………ちょっと頭痛がして……………」

苦笑いしながら勝は答えた。

すると、勝の頭にまたあの声が流れてきた。

（少年よ……………仲間は、もう近い）

「!」

声に気づいた勝は急に立ち上がり辺りを見回すが、ただの漆黒の闇だけである。

（もつと下だ……。……。急げ。バッダースが来るぞ）

「バッダース？」

勝は、急に階段を駆け足で降り始めた。

「勝?!」

赤城は、慌てて追いかける。

「ハッハッ。」

いつもより走ってるのになぜかいつもより体が軽いと勝は感じた。

降りると、また扉があった。

その扉には『ハメツノウウシャ』と書かれていた。

勝は恐る恐る扉を開いた。

続く

第1話 破滅勇者の生誕 - 02 (後書き)

あとがきコーナー。

作者「あゝ。疲れた。」

そう言い、いすの背もたれに体を預けると、後から思い切り叩かれた。

勝「おい！駄目作者！！」

作者「おお！勝君。」笑顔で対応する。

勝「いつになったらロボット出す気？もう第2部分だよ！！」勝は切れ気味である。

作者「次くらいじゃない？」

勝「次くらいって……。そんな曖昧にするなよ。」

作者「だゝって……。」「

勝「はゝ。オマエって何なんだよ。こんな作者嫌だな。」勝は下を向いた。

作者「どうもどうも。」

勝「誉めてねえよ！！」勝の鉄拳が、作者の右頬に直撃した。

第1話 破滅勇者の生誕 - 03 (終)

キィという乾いた音が館内に響いた。

「・・・・・・・・・・」

勝の顔はいつも以上に真剣だった。

(ここなのか・・・・・・・・。あの夢に出てきた奴が呼んでいた場所
は?) 勝は高鳴る心臓を押さえるように深く深呼吸し思いっきり開
いた。

「あ! あれは・・・・・・・・」

二人の前には、例の玉がおいてあった。

「これが・・・・・・・・例の玉か」

感動したように赤城は自分の青色の目をきらきらさせて、玉を見つ
めていた。

(だれもいない・・・・・・・・勝は室内の至る場所を探したが、
何もなかった。

(少年よ・・・・・・・・ここだ・・・・・・・・) またあの声がした。

「どこなんだ・・・・・・・・」

勝は振り返ると、玉が自然と目に入った。

「これなのか？」

勝は、そつ言い玉を持ち上げた。

その瞬間、パツと玉が光だし、その白い光は勝と赤城を包み込んだ。

「なんだ・・・・・・・・・・？」

赤城は不安そうにキヨロキヨロし始めた。

「汝よ、我は待っていたぞ・・・・・・・・・・!!!!!!」

光の中で、勝の頭いや、耳に直接入ってきた。

光はさらに輝きを増した。

「・・・・・・・・・・。ハッ!!」

勝は長いような眠りから起きたような爽やかさが体中に感じた。

「赤城は・・・・・・・・・・？」

勝は辺りを見回すが当たりは真つ暗な空間であつた。

すると、目の前に青い光が現れた。

「ようやく目覚めたか……勇者よ……」

青い光から発せられた声は夢と一緒のものであった。

「……またか、一体お前は何なんだよ?! 夢にまで現れやがって……!」

勝は今までためていたものを一気に開放するかの勢いで叫んだ。

「……そうだな。私の名前は宇宙連合組織破滅勇者隊副隊長
ディバンだ。まあ今は、本当の姿を出せることができないがよろし
くな」

そう言い、鼻笑いみたいなのをした。

「はめつゆうしゃたい……?」

勝は何の事が全くわからなかった。

「ああ……。破滅勇者隊。私たちは、全宇宙を観察及び平和を
保つ連合組織宇宙連合の180もの隊があるうちの一つの小隊だ」

ディバンと自称する光は説明を続ける。

「われわれは先ほと言ったように全宇宙を観察及び平和を保つ事を
目的とした団体だ。宇宙西暦180年人間の年の数で言うと……
・5000万年くらいであろうか。われわれの監視下の下宇宙の平
和は、保たれていたんだ……。奴らが来るまでな……」

ディバンの声はいつそに強くなった。

「その奴らつて……何なんだよ？」

勝がディバンに聞く。

「……宇宙壊滅組織バツダースだ……。奴らが突如全宇宙を恐怖の渦に巻き込んだんだ！」

ディバンの声は怒りに溢れていた。

「バツダース……」

勝はディバンの話を深く受け止めようとしていた。

「オルガ星域に存在するパラス星、ここで、悲劇は起きたんだ……」

オルガ星域　パラス星

地球の似たように自然に溢れ、水も清く人々は豊かな暮らしを過ごしていた……。

しかし、事の発端は一部の私欲の塊たちの起こしたテロだった。

ドガガガガン！！！！突如空から無数のミサイル爆弾が降ってきた。

炎に包まれる森、山、枯れる大地、泣き叫ぶ人々。

バランス星に存在する宇宙壊滅宗教組織バッダーズ。

教祖、ラクラス・バッダーによるある一言がこのような大惨事を起こした。

「宇宙を壊し、われわれの望む世界を作ろう」

その後バッダーズは確実に組織を強化していき、どんどんと、惑星を破壊していった。

このことに対し宇宙連合組織は、破滅勇者隊（バッダーズ破滅連合勇者特別部隊）を結成した。

そして、我々は次なるターゲットとなっている地球へやってきたわけだ」

ディバンの話を聞いていた勝は、こんなことが全宇宙で起きていることが信じられなくなってきた。

「それで、お前副隊長なんだろう？リーダーはどうしたんだよ？」

勝はディバンに期に練っていたことを聞いた。

「ああ。隊長は……君だ天下 勝殿」

「え………？」

ディバンの急な発言に勝は言葉を失った。

「俺、そんな奴らと戦う力なんて無いよ？」

勝はディバンに訴えた。

「ああ、そのぐらいはわかっている。君は戦うのではなく私たちの力の源になってほしい！」

「源？」

勝はさらに話がわからなくなってきた。

「君の中に眠る勇気の力を貸してほしいんだ！」

ディバンは力強く訴えた。

「勇気の手……？俺そんなの持っていないよ？」

勝はだんだん意地になってきていた。

「自覚するわけが無い。今日君が入ってきた扉あれを開けたのは君が初めてなんだ。あれを開けることができたのは勇気の手を持つ証拠なんだよ！」

ディバンは強く言う。

「……………」

勝は無言のまま自分の両手をグーパーグーパーさせた。

「君しかいないんだ。頼むバラス星のような悲しい出来事をもう起こさせたくないんだ」

勝は、拳を力強く握り言った。

「やってみるよ!」

勝は決意をした。

勝は静かに目を開けた。

小屋の外に出ていた。長い時間はなしていたはずなのに、時間は5分くらいしかたっていないかった。

「夢……?」

小は隣に眠る赤城の姿を見て呟いた。

「夢ではない!」

勝は声がするほうを見た。なんと、通常より1・5〜2倍くらいの大きさのジェット機からデイバンの声がした。

「デイバンなの……?」

勝は自分の目を疑った。

「そうだ、これが私の真の姿だ……。チェンジデイバン!」

そうディバンが叫ぶと、ジェット機が変形した。

銀色の翼を持ち、全体を銀と赤を貴重とした引き締まったボディ、頭には金色のV字の飾りをつけている。

「白銀の翼！今こそ飛び立つ！悪の魂を葬るために……破滅勇者隊副隊長、ディバン推参！」

今ここに、地球を舞台とした、少年とその仲間たちの戦いが今始まるうとしていた。

破滅勇者生誕也。

続く

第1話 破滅勇者の生誕・03（終）（後書き）

次回のお話

ついに地球へ襲来した宇宙壊滅宗教組織バッダーズ。

それを阻止せねばと、ディバンと勝は戦いに出る。

そして二人目の仲間が目覚める。

第2話 破滅合体！ディバイガン！

ディバンの真の力、ディバイガン推参！

前回不評だったあとがき部屋

作「はい、どうもマルスマンです。」

ディバン「やつと私の出番が来たか……。」

作「ごめんね。ディバン君。ラーメンでも食べてよ。」

ディバン「いや、私は機械なので……。」

勝「じゃあ俺が食う!!」

作「はあ？駄目に決まってんじゃない。お前、俺のこと前回殴ったもん！」

勝「・・・・・・・・う！」

作「じゃあ、俺がこれ食ってる間に次回の面白いところ教えといて。」

勝「あいつゝ！・・・・・・・・次回はどうとう俺と、ディバンがバツダーズと戦うぜ！」

ディバン「私たちの仲間の。。。。が目覚めます。」

????「はっはゝ！俺様の出番だぜ！！」

勝&ディバン「まだ出なくていい！」

作者「ひはいもおへはいひまふ（次回もお願いします）モグモグ・・・・・・・・」

第2話破滅合体！ディバイガン！ - 01

白銀の翼を持つ巨大機械超人ディバン。

そのディバンが所属する破滅勇者隊隊長天下勝。

今ここに、地球存亡をかけた戦いが始まろうとしていた！！

「ディバン・・・・・・・・」

勝はディバンの真の姿を見て驚いていた。

「黙っていてすまなかった。私は機械の体でできている・・・・・・・・。バッターズを倒すために私は生まれた」

ディバンは自分の拳を黄色に輝く目で見つめていた。

「いや、そんならいしないと奴らに勝てないから別に驚いていないよ・・・・・・・・」

勝は力強く言った。

「ありがとう・・・」

勝には、ディバンが笑っているように感じた。

「そうだ勝、君にこれを渡さなければならなかった」

そう言いディバンは勝に携帯のようなものを渡した。

「これは………？」

勝はディバンに聞いた。

「これは、破滅勇者隊の一員及び隊長であることを示すもの、『カイザーモバイル』これで君に敵が現れたとき私から通信をする。そして君はこれを使って、破滅勇者隊の隊員に指令を出してほしい」

勝は、もらったカイザーモバイルを見た。赤を貴重とし、青のライオンが3本入り、たぶん破滅勇者隊のエンブレムと思われるものが中心についていた。

「わかった……。大切に使うよ！」

勝が笑顔に言うのに対し

「頼んだぞ！リーダー！」

とディバンが優しい声で言った。

そうすると、池野神町の外れでものすごい雷鳴が響いた。

「……！」

その方向をディバンは見つめた。

「雷??？」

勝はあまりの激しい雷鳴に驚いていた。

「勝。もう来てしまったぞ……………」

ディバンが緊張した声で言う。

「バッダーズが？」

勝が言うと、ディバンは頷いた。

「本当に戦いが始まるぞ……………」

ディバンは、ジェット機に変形し勝に言った。

「私に乗るんだ！」

ディバンは自らのハッチを開けた。

「わかった！」

勝はまだ眠っている赤城をディバンの後部座席に寄せ自分も前部座席に乗った。

「シートベルトをしっかりとするんだよ…………。行くぞ!!」

ディバンのエンジンが轟音を出し、それと共に上空へ飛び出した。

始めてみる上空からの町並みそして、雷鳴を轟かせる黒雲。勝はいつもでは考えられない経験をしている事に胸でいっぱいの気持ちに

なっていた。

「勝。あれを見る！敵だ！」

ディバンが指している方向を勝は見た。

それは、うごく巨大な石像であった。

「……………あれが？」

勝はディバンに問う。

「ああ、奴らはあるものの中に自分らの魂を注入して生き物にし、破壊をするんだ」

ディバンは敵を睨むようにしている。

勝は、恐怖感に襲われた。下では豆粒のような警察、自衛隊が抗戦しているものの、相手は全く気にせず、山を破壊している。

「今回は、都会とか人が多いところでなくてよかった」

ディバンはほっと一息をしていた。

（逃げちゃ駄目だ勝！やるしかないんだ。僕にしか地球を守れないんだ！！）勝は決意を固めた。

「ディバン、地球を守ろう！」

内気的な勝から意外な発言が出て、ディバンは少し驚いていた。

「…………ああ。それでこそ、君を選んだ価値がある！ディバン
チェンジ！」ディバンはヒューマノイドモードに変形した。

そして、ゆつくりと、石像の前に降り立った。

「白銀の翼！今こそ飛び立つ！悪の魂を葬るために…………破滅
勇者隊副隊長、ディバン推参！」

ディバンがそう言い、石造に指を指した。すると、石像も話しかけ
てきた。

「ウチュウレンゴウ！」

石像は顔の色を変えてこちらを睨んできた。

「勝、君に渡したカイザーモバイルをちゃんと持っているな？」

ディバンが勝に聞く。

「持ってるよディバン！」

勝はそう言い、右のポケットから取り出した。

「それを、『ブレイブ・フージョン』と叫びながら私のこの点滅し
ている場所にカイザーモバイル差し込んでほしい。」

ディバンはその場所を赤いランプで光らせた。

「わかった。やってみる……………ブレイブ・フュウジ

「ヨオオン!!!」

と叫びながら勝は、カイザーモバイルを差し込んだ。

すると、カイザーモバイルに吸い込まれるように勝は、前部席から、広いモニターの付いているコックピットにワープした。

「……………すごい」

勝はただ驚くことしかできない。

「行くぞ！勝！」

ディバンの声のはつきりと聞こえる。

「うん！やろう！！」

勝はそう言い、左右についているレバーを握った。

「勝、その握っているもので、私を動かせ、またそれから君の勇気の力を私は感じる事ができる。だから君の勇気が少なければ私も十分に力を出せない！」

「わかった。……………よし！」

ディバンの説明を聞き勝はやる気が出た。

ディバンは、少しずつ相手に向かって歩み始めた。

一方地上では、報道陣が大騒ぎしていた。

「ありゃ、ロボットなのか………?」

NHS（日本放送ステーション）は、各局とは違い地上から現場を撮っていた。

「まいちゃん！本番やっちゃおう！」

ディレクターと思われる男性が、女性に言った。

そして中継が彼女にもうじき回ってくる。

ADの男性が指で数字をあらわす

3

2

1

「えゝこちら行け野上町から少し離れた山地にあります。須田^{すだ}香^か織^{おり}です。先程、未確認生命体が、暴れる中、機械超人みたいなえー、未確認物体が上空より飛来しました」

須田は、懸命にリポートをしていた。

「えゝ。未確認生命体は、以前破壊を続けております。一体地球に何が起きているのでしょうか？」

須田は、無事取材を終えた。

そんな須田達を石像は、見つけてしまった。

「人間………」

石像の大きな手のひらが、取材人達に向かって落下してくる。

「………キャアアアアアア!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

そう叫び須田は、座り込んでしまった。

「ディバン!!」

勝は叫んだ。

「わかつている!!」

ディバンは、右足を踏み込み横から殴りかかった。

ドガガガガンという轟音を立てて石像のバツダースはぶっ飛んだ。

「おっし!!」

勝はコクピット内で小さくガッツポーズをとった。

「勝、喜ぶのは早いぞ………」

ディバンが険しい声で話す。

砂煙の中大きな影がまだ残っていた。

「オマエラ・・・・・・・・。オレヲオコラセタナ！」

そこには石像が立っていた。

石像の顔色が「怒」に変わった。

続く。

第2話破滅合体！ディバイガン！ - 01（後書き）

作者「あああああああ！寒い。」

須田「作者さんうるさいですよ。」

作「おお！須田さん。初めましてですな。」

須田「そうですね。」

勝「というか、何故アナウンサーだったの？意味あったの？」

作「え・・・・・・・・。あるっちゃあるけど、まあサブキャラだね！」

須田「え・・・・・・・・そんなあ」（泣）」

赤城「俺っていつまで寝ていればいいの？」

ディバン・勝・須田・作「あゝ赤城なんていたね。」

第2話破滅合体！ディバイガン！ - 02

砂煙の中大きな影がまだ残っていた。

「オマエラ・・・・・・・・。オレヲオコラセタナー!!」

石像の顔色が「怒」に変わった。

「・・・・・・・・怒ったのかな？」

勝は大型モニターから怒っている”石像”を見つめていた。

「ウツグググウルザヌウルザヌウルザヌ・・・・・・・・」

石像はこちらへ向かって、ものすごい大きな地響きを立てながら歩いてくる。

「勝・・・・・・・・。来るぞ！」

ディバンの言葉に勝は静かに頷いた。

「ウツググウググ・・・・・・・・ウガアアアー!!」

石像は大きな声で叫んだ。

すると、なんと勝たちの前から急に石像が消えたのである。

「どこに行ったんだ？」

ディバンの頭部は、左右に動く。そして、次の瞬間。

重い物体がディバンに直撃した。なんと、上から石像がディバンめがけて落ちてきたのである。

「うあああああ！！！」

ディバンの体は、石像の重さに耐えられず、地面に食い込んでしまった。

「グフ・・・・・・・・・・はあはあ・・・・・・・・・・」

子供の勝にとって今の一撃はかなりの衝撃であった。しかし体へのダメージよりも精神的な衝撃が強かった。

「ガタガタ・・・・・・・・・・」

勝の歯は小刻みに震え始めた。

「勝？どうした・・・・・・・・・・」

ディバンが心配そうに勝へ言う。

「無理だよ。こんなの。今の見て確信したよ。無理だよ・・・・・・・・・・。こんなの」

勝の目には溢れんばかりの涙がたまっていた。

すると、ディバンの機体の色がだんだんと灰色に近い色に変わった。

(・・・！マズイ！！勝の勇気の力が弱まっているのか・・・！)

すると、右から石像の鉄拳が右の腹部に当たる。

「グウウ！！」

ディバンは抵抗しようとするが、うまく体が動かず反撃ができない。

「ユルスマジユルスマジ！！」

次に左側から鉄拳が襲い掛かってくる。

思い切りディバンはぶっ飛び山に激突した。ディバンの機体の色がうつすら赤や、青の色が残ってるぐらいではぼ灰色だった。

しかし、石像は容赦が無い、硬い両足でディバンの腹部を集中的に攻撃する。

「ググウウウウウ！！！！！！」

ディバンの呻き声がする。

勝は巨大モニターから、石造の攻撃を震えながら見ている。

無理に決まっているじゃないか、相手が悪すぎるのにどうしてディバンはここまで頑張っているのだらうか。勝には全く理解ができなかった。

その内コクツピトにもひびが入ってきた。勝は死ぬかもしれない心

でそう思っていた。勝は目をつぶり今までの人生でも振り返って見た。

・・・・・・・・・・・・・・・・勝。だから勝つてば！何やってんのよ！

僕を呼ぶのは・・・・・・・・誰なんだ？

勝ったら！紀香先行っちゃうよ！

・・・・・・・・・・紀香・・・・・・・・・・。幼いころの紀香であった。

まってよ・・・・・・・・紀香あ！

・・・・・・・・・・あれは、幼いころの俺だ。

幼いころの勝と紀香であった。紀香が自分をいじめた2個上の少年を倒しに行こうとしているところであった。

・・・・・・・・・・おい！この野郎！よくも勝をいじめやがったな！！

・・・・・・・・・・そうだこのころ俺は、弱くつてよく紀香に守られていたな・・・・・・・・。

しかし、強気な紀香でも、2歳上の少年にかなうはずが無い。

・・・・・・・・・・エ~~~~ン。やめて・・・・・・・・・・。エ~~~~ン。

・・・・・・・・・・バア~~~~カ！！俺様に勝てるわけじゃない

じ
ゃ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ん。

幼い頃の勝は、
いまだに木に隠れている。

あれ？このあと俺ってどうしたんだっけ……？

すると、幼い頃の勝が、木から出てきた。

・ ・ ・ ・ ・ やめろ！！そいつに今から指一本触れてみる！

-
-
-
-
- !

・ ・ ・ ・ ・ ブハハハッハ！馬鹿じゃないの。ちよんと。

少年が紀香の頭を触った。

この野郎！！！！！！！！！！！！！！！！！！

辺りは真っ暗になった。

うん。い。

幼い勝を膝枕して泣いている紀香がいた。

．．．．．ごめんね。勝。あたしのせいで．．．．．

幼い頃の勝は言った。

……いいんだよ。紀香のためならいいんだ。

勝の目から涙が流れていた。

僕はなんて馬鹿だったんだ……。あの頃の僕の方が、格段上の相手に向かっていたじゃないか。それなのに今の僕は……。何なんだ……。醜いじゃないか。

……。やるんだ！僕がやるしかないんだ！！僕が地球を守るんだあ！！！！

ディバンが急激に光り始めた。そのまぶしさに勝は目を瞑った。

「グアアアアアユルスマジ！！」

仏像が光ったディバンに一時驚いたが、殴りかかった。しかし、ディバンの右の掌が、石像の拳を押さえた。

「?!」

石像の顔が驚いた顔に変わった。

ディバンの機体の色は元通りになっていて、しかも気体の傷が消えていたのである。そう勝の勇気の力が復活したのであった。

「勝……。いや隊長」

ディバンがささやく。

「ごめんねディバン。決めてよ。もう迷わないよ。僕はもう絶対に迷わない!!」

(……その言葉待っていたぜ!!)

「!」

またであつた。勝の頭に声が聞こえたのであつた。

(お前なら、破滅勇者隊の隊長をやっていけるぜ!!)

ドガガガガと山がものすごい音を立てて、崩れた。

巨大なダンプカーが現われたのであつた。

「……………あれは!」

ディバンがその様子を見て驚いていた。

すると、ダンプカーは変形をした。

「この黄金の体!悪を排除するため誕生した!……………破滅勇者隊隊員、イガール!!」

ディバンの隣にディバンより体が一回り大きいロボット現われたのであつた。

続く。

石像が耳が破れそうな声を出しながらディバンたちめがけ落ちてくる。

「ヒヤッハハハ！俺の出番だぜ！！」

そう言いイガールは巨体を巧みに操り、石像を受け止めた。

「又ウ？！」

石像が驚く。

「ヒヤハハハ貴様の攻撃はそんなもんか？」
イガールは、笑ったように言う。

イガールは石像をぶちのけて、ぶっ飛ばした。

地面が磨り減る音が響く、地面を石像は滑っていった。

「すんげ〜」

勝はイガールの行動を見て、感動をしていた。

「ウヌヌヌヌ……ウガア！！」

石像はうなり声を上げ、石像が口をあんぐりとあけた。そして、だんだんと、口の中が黄金色に輝いていく。

「ウグオオオアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」
「！！！！」

と言うものすごい先日をしながら石像の口から黄金に輝く地平線に伸びる衝撃波が放たれた。

「ヒヤハア?! デイバンこいつはやばいぜ?」

イガールは自らデイバンの前に立ち、右手の積荷を前方に突き出した。

積荷部に思いっきり衝撃波がぶつかる。その衝撃波のあまりの強さにイガールが後に少しずつ下がっていく。

「うひゃあ! こいつは結構……………」

何とかイガールは、衝撃波を払ったが、その代償はひどく、体中にひびが少し入っていた。

「……………デイバンちゃんさ、今こそ俺らの新の力見せるときじゃネエカ!!」

デイバンはそれに答えるように首を頷かせる。

「勝! カイザーモバイルを開きコード「821」を入力したら”破壊合体デイバイガン”と叫んでくれ!」

デイバンは急ぐように言う。

「破壊合体……………。わかった! コード821!!」

勝はすばやく入力する。

「破壊合体!!」

そう言い勝は差し込み部分の場所に差し込んだ。

「了解した!!」

両機はそう叫び上空へ飛んだ。

ディバンはジェット機に変わった。

イガールの体は、変形をし、両手下半身を形成した。

ディバンは特別な変形をし上半身に変形し、イガールとドッキングした。

「破滅の力。今解放するとき也。破滅隊副隊長!!破滅合体ディバイガン!!!」

巨人は静かに地上に降り立った。重厚感がある体、黄色に赤に青を貴重とした全体。頭には4方向に伸び、背中には銀色の翼が生えていた。

「来い!外道」

ディバイガンは右手の人差し指と中指をクイクイと動かして、挑発をしていた。

「ウヌヌヌヌ!!!ユルスマジイイイイイイ!!!」

石像はそう叫び、体を浮遊させた。

「飛んだ?!」

勝は驚くが、ディバイガンは冷静であった。

そのまま、石像の巨体が突っ込んでくる。しかし、ディバイガンは全く動こうとしない。

「ディバイガン!!このままじゃ攻撃されるよ?」

勝が言う。

「まあ、見ているんだ」

そうディバイガンは言う、銀色の翼を広げた。

「グアアアアアアア!!!!!!」

石像が突撃しようとした瞬間ディバイガンはものすごい速度で上空へ飛び、華麗に攻撃を避けていた

「どうした?こんなもんか?」

ディバイガンは、余裕そうに空中に浮遊していた。

「ウヌヌヌヌ.....」

石像の顔色がさらに変わっていく。

再び石像は、口を大きく開けた。どんどんとエネルギーが集まってい。そして、先程の倍ものの衝撃波が放たれた。

「破滅剣!!」

デイバイガンが言うと、胸の称号から光が放出し、それが剣へと形を成形する。

デイバイガンは破滅剣を両手でしっかりと握り、それを頭の上へ振りかぶった。

「一文字斬り!!」

デイバイガンは、破滅剣を振り下ろし、衝撃波を真つ二つに斬り分けた。

「ウヌヌヌヌ!!!!!!」

石像は悔しそうな声を出す。

「止めだ!バツダーズ!!!!」

破滅剣をしっかりと握り、銀色に輝く翼を広げ、石像に向かい超高速で突進を始めた。

「破滅剣!!!覇王.....」

剣を振りかぶる。

「両断斬り!!!!」

それは一瞬だった。石造は綺麗に真っ二つに分かれた。

斬られた石像の体から蒼く光る球体が現れた。

「デイバイガン……これは？」

勝がデイバイガンに聞く。

「バッダーに騙された人の魂だ……。何も罪が無いのに、命を犠牲にされるんだ……」

デイバイガンはそれを胸に注入した。

「私達の戦いは非常につらく悲しいものなんだ勝……。私達の敵は、信じてた人に裏切られた人々がほとんどなんだ……」

デイバイガンが言う。

「だから私達がこの悲しい戦いを止めるんだ……！」

勝はデイバイガンの言葉が心に深く残った。

続く。

第2話破滅合体！ディバイガン！ - 03（終）（後書き）

次のお話

何とか、石像をディバイガンの力で倒した破滅勇者隊。

しかし、次の敵は海中で現れた！！

そして、3番目の仲間が現れる。

次回 第3話 深海決戦 ジャックトリオ！

勇者達の一言

ディバン「なあ、イガール。」

イガール「ひやは？なんで〜い？」

ディバン「前から思っていたんだけど、いつもお前妙にテンション高いな……………」

イガール「ひやは？お前が静か過ぎるんだよ！」

ディバン（それは無いと思うが……………。）

第3話 深海決戦！ ジャックトリオ！ - 01

勝が石像を倒してから1週間が経っていた。その後バツダーズからの襲撃も無く、静かにのんびりと過ごす事ができていた……と言っわけでもなかった。

「なあ。勝あの日何があつたんだよ」

赤城が、勝の肩を持ち左右にふらふらと揺らす。

「だくから、何も無かつたて言ってるじゃないか」

勝が嫌そうに答えている。

勝は溜息をつきながら窓を見ていた。

あの日から連日ワイドショーでは巨大ロボットと、石造の激闘のことを報道している。そのとき現場近くにいたと主張している赤城は、寝ていたことを後悔して、勝に何があつたかいつも学校で聞く。

その事に勝はもううんざりしているところであつた。

「勝。大変ね。いつも赤城君にあんなにされちゃって」

紀香が勝の前に現れそう言った。

勝は首を立てに頷かせて、机にぐだーっともたれ掛かった。

あの日から自分の生活は変わった。自分は、地球を守る破滅勇者隊

の隊長になった。このことが勝にずっしりと、プレッシャー圧力をかけていた。

（バツダースなんてもうこなければ楽なものにな……。）
勝はそんなことを思いながら、右ポケットに常備しているカイザーモバイルを見た。

それをしまい勝は再び机に顔をつけた。

数時間し、学校は、終わった。

「勝、帰るわよ！」

昇降口で紀香と、赤城と合流し帰路に着いた。

勝は帰りながら思っていた。なぜバツダースが来ないんだろうか。確かに来ない方が勝にとっては楽であるはず、しかし、あまりにも襲撃が無いので、その疑問が勝の心に生まれていた。

「う……しょう！もう勝ッたら！！」

紀香が、怒ったように勝の名前を呼んでいることに気づいた。

「ごめん呼んだ？」

勝は、参ったように言った。

「あんた最近変よ？学校いてもぐったーとしてるか、ぼーっとしてるだけだし、らしくないじゃない！？」

と紀香に言われた。

確かにそうである。いつ来るかわからない敵に夜は眠れず、精神的にも疲れていた。

「うん……………」

勝は力の無い返事をして、その後あまりしゃべらず二人と別れた。

家について、手洗いうがいをして、階段をささつと登り自分の部屋のベッドに横たわった。

「はあ…。地球を守るってのも大変なんだな…」

勝は改めて破滅勇者隊の大変さを見に感じていた。

勝が、ベッドに横たわっていると、右ポケットに入っているカイザーモバイルが大きな機械音を出し鳴り出した。

（ちなみにカイザーモバイルの音は、勝にしか聞こえない特別な設定になっている。）

（カイザーモバイルがなっている？襲撃なのか？）勝はすぐさまカイザーモバイルを取り出し、通信体制に入った。

「勝か？私だ、ディバンだ！」

カイザーモバイルを通し、ディバンの声が聞こえる。

「聞こえるよ！ディバン。バッダースが襲撃に地球へ来たの？」

勝が不安そうに聞く。

「ああ。君の言うとおり、襲撃がもうじき来る。なので、先回りし、奇襲するぞ」

勝はその話を聞き、外へ出て、学校の裏山に行った。

学校の裏山には、ディバンが待ち構えていた。

「勝。来たか……。行くぞ！」

ディバンはヒューマノイドモードから、マシンモードになり飛び立った。

勝たちがしばらく飛んで到着した場所は、東京湾であった。

「東京湾……。？」

勝は、地平線に広がる海を見て、不思議そうに見つめた。

「勝……。あれを見ろ！どうやら奇襲は失敗したらしい……。」「」

ディバンが示す先には、大きなアオリイカと見られるものが海の中で暴れていた。

続く。

第3話 深海決戦！ ジャックトリオ！ - 01（後書き）

あとがき。

デイバン「イカ．．．．．ここでは食すらしいな？」

勝「うん！イカは美味しいんだよ。焼きイカでしょ．．．イカ刺しでしょ．．．．．それから．．．。」

イガール「ひやは？イカ食うのかよ？サバル星に行った時は、ペットとして一緒に散歩してたぜ！！」

勝「．．．．．へえゝ。そうなんだ。地球では犬みたいなもんだね。」

デイバン「犬ってあの焼き犬とかの犬のことか？」

勝「．．．．．。」

第3話 深海決戦！ ジャックトリオ！ - 02

「イカだ……」

勝は海で暴れているイカを見てそうつぶやいた。誰がどう見てもイカでしかない。しかも、アオリイカだ。

「あれが、今回の敵だ。勝、気を抜くなよ！」

ディバンは勝にそう言いヒューマノイドモードへ変形した。

勝は無言で頷いて、静かに目を瞑り、心を落ち着かせた。

大丈夫。自分ならできる。僕がやるんだ勝は自分にそう言い聞かした。

勝は目を開き、気合を入れて、両手でしっかりとレバーを握る。

「行くぞおおおお！！！！」

そう叫び勝は思い切りレバーを前に押す。

ディバンは、ブースターを思い切り点火させ、アオリイカもどきに突っ込んだ。

「イカイカ………。アイツは何イカ？」

アオリイカもどきは、自分に突っ込んでくるディバンを見つめた。

ディバンは、近づくなりアオリイカの頭部に左手の突起部分を直撃させた、直撃を食らったアオリイカもどきは思い切りぶっ飛ぶ。

「イカイカアアアアア！！何をするイカ？！」

アオリいかもどきは怒ったようにディバンに言う。

「イカイカ・・・・・・・・・・？」

勝は今まで見たこと無い口調に驚いた。

「バッダース！貴様を破滅させに来たぞ！！」そう言いディバンは指を指した。

「イカイカ・・・・・・・・・・。もしか、貴様が宇宙連合の中でも我々の行動を邪魔するものイカイカ？」

アオリイカもどきは目を細めた。

「何を言う！貴様らが、宇宙の平和を乱しているんだろが！！」

アオリイカもどきの言葉に抵抗するようにディバンが言う。

「イカイカ・・・・・・・・・・。コイツ！ウザイカ！食べてやるイカアア！！！」

アオリイカもどきは口から黒い墨の玉を3発を出した。

「くう、来たか！」

勝はレバーを勢い良く右にした。ディバンは、足のブー스트で右に避けたが、3発中1発が左足に当たってしまった。

しかし、衝撃は無くただ水が体にベシヤット当たった感じがしただけであつた。

「なんだ．．．．．こんなだけか」

勝は、それがわかりホツとした。

「甘いぞイカ．．．．．!」

すると、左足についた墨が見る見るうちにディバンの左足を黒く染め上げていく。

「なんだ．．．．．!」

勝は、どうもすることができない。

「勝落ち着け!私は何とも無い!」と言い、ディバンは体を動かして見せた。

「イカイカ．．．．．そんな早くには、我特製の「イカ墨ウィルス」の効果は出ないイカ!」

アオリイカもどきは、触手を伸ばした。

「そんなものお!」

ディバンは、腰の部分のパーツを取り出した。すると、そのパーツ

は銃の形に変わった。

ディバンは引き金を引いた。すると黄色い光線が銃口からから触手へ向かって放たれた。

触手にぶつかるなり、爆発を起こした。

「イカイカ……痛いイカ！」

イカは触手を2本増やし、3本ディバンに向け襲い掛かった。

「これは、避けるしかない」ディバンが動こうとした時、左足に違和感を感じた。

「どうしたのディバン？動かないと……」

触手がディバンに直撃した。ディバンは衝撃の強さのあまり倒れてしまった。

「ウグググ……。ディバンどうしたの。」

「勝……。どうすればいい？足が動かないんだ……」

ディバンは辛そうな声で話す。

「え……。？」勝は左のレバーを動かすが反応しなかった。

「そんな……。勝の額に汗が浮き出てきた。」

「イカイカイ……。それが我が「イカ墨ウイルス」の効果！」

相手の動きを止めるイカ!!」

アオリイカもどきは絶対的勝利を確信し、高笑いする。

「くそ!どうする事もできないのかよ……………」

ディバンの機体の色が、灰色かかってきていた……………。

続く。

第3話 深海決戦！ ジャックトリオ！ - 02（後書き）

イカ「イカイカ〜。様見るイカ！」

勝「うざいね。君……………」

デイベン「食っちゃうか？」

イガール「囲炉裏持つてるぜ！！」

須田「涎出てきましたよ。」

紀香「あたしお腹すいちゃった……………」

イカ「ちょ……………みなさん……………。いやそのイヤアアアアアア……………！！！！！！！！」

作「あはは次回もよろしくお願いします。」

意見感想等も待っています！

第3話 深海決戦！ ジャックトリオ！ - 03

「どうすればいいんだ……」

勝の心に不安が生まれて、勇気を確実に侵食している。

「勝！諦めてはいけない！まだ、勝負がついたわけでない！」

何とか、ディバンは勇気の力を安定させようとした。

「うん……わかってるよ」

勝はレバーをしっかりと握りなおした。

「イカイカ……何も動けない貴様に何ができるイカ！」

アオリイカもどきは笑っている。

「誰が、破滅勇者隊は奴一人と言ったんだ？ひやはは！」

「誰だ！イカ！」

アオリイカもどきは体の方向を声がするほうへ向けた。

「ひやはは！この黄金の体！悪を排除するため誕生した！……
破滅勇者隊隊員、イガール！！」

イガールはそう言い、ビルから地上へ降りた。

「奴の仲間イカ？」

アオリイカもときは目を細める。

「ひゃは！そうだぜ！ディバン、隊長！助太刀に来たぜ！！！」

イガールは、ディバンの元へ行き、ディバンの体を起こした。

「すまない………。イガール」

ディバンはすまなそうな声で話す。

「いいんだぜ！相棒！さて行くぜひゃは！！！」

イガールは、ディバンを見つめる。

「勝！合体だ！」

ディバンの叫びと同時に頷く勝。

「わかった！コード「821」！破滅合体！！！」勝はカイザーモ
バイルを差し込んだ。

「了解！！」ディバンはジェット機に変形して上空へ飛んだ。

イガールは変形し、ディバンと合体する。

「破滅の力。今解放するとき也。破滅隊副隊長！！破滅合体ディバ
イガン！！！」

ディバイガンは静かに地上へ降り立った。

「イカア？合体したイカか？」

驚いたようにアオリイカもどきはディバイガンを見つめた。

「フ．．．倒して．．．．．！！」

ディバイガンの右腕部分が黒く染まりあがってきた。

「イカア？まだ、さっきのウィルスが残ってるみたいイカね」

アオリイカもどきは、再び墨の玉を吐き出した。

「来る！！」

勝はさっきのミスをしないように避けるようにレバーを動かすのを早めた。

何とか全部避けることにはできたが、腕一本使えないのは結構つらいはずだ。

「イカカ！さっきより機動力は上がっている見たいイカ．．．．．ならやるしかないイカ！！」

アオリイカもどきは、青く澄み渡る海に潜った。

「！海に潜ったのか！」

ディバイガンは驚く。

「デイバイガン！追うしかないね！」

「ああ！」

デイバイガンは銀色の翼を広げ、海へもぐりんだ。

水に飛び込む大きな音が東京に響いた。

東京湾の水は、政府のクリーンシー計画により、沖縄の海に負けな
いほどの美しさを誇っていたので、あたりは何とか見渡せる。

「奴はどこだ………？」

デイバイガンは首を左右に動かすものの、アオリイカもどきの姿は
見えない。

「イカイカ！こつちイカ！」

アオリイカもどきは勢い良くデイバイガンに突っ込んだ。

「グアアア！」

ものすごい衝撃がデイバイガンのコックピットを襲う。

「イカイカ！さっきまでの攻撃はどうしたイカ！」

アオリイカもどきは、地上では見せなかった素早い動きを、勝た
ちに見せた。

「速い………そうか！以下は海の生物だから懷中でその本領を発揮するのか！」

勝がそれに気づくのはあまりにも遅かった。

「イカイカ！行くイカよ！」

アオリイカもどきは、触手を伸ばした。

「来る！」

勝はレバーを動かす、しかし、地上と違う海中の中では、ブースターの効果が発揮されずに直撃を食らった。

「グウ！！」

勝に更なる衝撃が襲い掛かった。

「くそ！どうすればいいんだ！！」

デイバイガンの叫びは海中で響くだけであった。

「イカカカ………まだこれからイカ！」

アオリイカもどきは再び、海中の中で素早い動きを始めた。

勝の顔色が青くなってきた。

「負けるのかな………」

ディバイガンの機体の色は灰色になってしまった。

続く。

第3話 深海決戦！ ジャックトリオ！ - 03（後書き）

イカ「地球の海綺麗イカね……………」

勝「そう……………？東京湾よりハワイの海の方が綺麗だよ」

作「何時かハワイ行つてみたいな……………」

須田「行つた事無いんですか？プププ」

作「笑うなよ……………さもなくばここからも出番なくすよ」

須田「そんなのないですよ……………」

作「嘘だよ……………今回はね」

ディバン「……………怖！」

次回もよろしく願います。

感想意見お待ちしております。

第3話 深海決戦！ ジャックトリオ！ - 04

「イカイカ！！！！」

アオリイカもどきの猛攻は続く。

「くう！」

動く左腕だけで、何とか防御するものの機体の色が灰色なので、衝撃は強い。

「勝！お前は決意したんじゃないのか！！このままでは負けるぞ！！」

「わかってるよ………わかってるけどさ………」

勝は下を向いているだけであつた。

勝は、自分はやはり破滅勇者隊に向いてないのではないかと思う思いがだんだん浮かび上がってきた。もう駄目だ………あきらめちゃうのかな………僕決めたのに………やはり結局こうなるのか………。

勝はだんだんと、戦いが嫌になってきていた。

「勝！どうしたんだ！！地球を守るんじゃないのか？！！」

勝に訴えかける。

「なんか．．．．もういいや、勝ってこないし．．．．」

勝の勇気の力はもう限りなく0に近かった。

「勝．．．．．、お前が愛するものへの気持ちはそんなものだったのか．．．．！」

デイバイガンはアオリイカもどきの攻撃を必死に守りながら話す。

「もういいんだよ．．．．、やっぱり僕にあってないんだ」

「勝！あの決意は嘘だったのか！！」

デイバイガンが叫ぶ。

「もういいじゃないか！！いいっていったらいいんだよ！！」

勝は座っていた席から立ち上がった。

「勝．．．．」

「わかってるよ．．．．守んなきゃいけないのは．．．．でも、もう嫌になつてきちゃったよ．．．」

勝は今までためていたものを耐え切れず出してしまった。

「勝．．．．！だからこそそこで頑張らなきゃいけないんじゃないのか？勝、君は愛するもののいる地球を守るため頑張れるんじゃないのか？」

愛するもの……勝は黙り込んだ。

そしてゆっくりと席に静かに座り込み、レバーを握った。

「何度もごめん……、やろう！ダイバイガン、勝てるかわからないけど、やれるだけやろう！」

機体の色が戻った。

（お前の気持ち見せもらったぜ！）

「！声……。」

勝はまた声がしたのに気づいた。

（おもしろいな……気に入ったぜ！なあ兄ちゃん！）

（ああ！我らの力君に貸そう！！）

急に海底がゆれた。

「！！何だ？」

勝は急なゆれに驚いた。

すると、海底が割れ中から、潜水艦が出てきた。

「……！もしかジャックトリオか！」

ダイバイガンが叫ぶ。

「お待ちせ、デイバイガンの兄貴！」

潜水艦から声がした。

「弟達よ！発進だ！！」

潜水艦の後ろの部分の扉が静かに開いた。

「わかった！兄貴」

潜水艦から戦車と、ドリル戦車が出てきた。

「ジャックチェンジ！！」

「海底に眠りし、正義……破滅勇者隊ジャックマリ
ン！」

「見せてあげます！ドデカイ悪への一発！……破滅勇者隊
ジャックタンク！」

「どんなものでもぶち壊す！この右腕……破滅勇者隊
ジャックドリル！」

「3人合わせて！ジャックトリオ！」3人はアオリイカもどきをに
らんだ。

「デイバイガン、彼らは……？」

勝はジャックトリオを見つめながら言った。

「彼らは水中戦のプロフェッショナルのジャックトリオだ……
来ていたのか……」

デイバイガンはうれしそうに言う。

「ドリル、タンク！フォーメーションアタックで攻めるぞ！！」

マリンが言う。

「「わかったぜ兄ちゃん！！」」

3人は別々の方向へ飛んだ。

「イカイカ……何人来ようが、我が「イカ墨ウイルス」の
餌食にしてやるイカ！」

アオリイカもときは、イカ墨の玉を3人に向かって放った。

「「ふ……甘い！！」」

マリンはタービンで跳ね返し、ドリルは余裕で避け、タンクは、地面に砲撃し上方へ飛びそれぞれ避けた。

「すごい……」

勝は3人の力に驚かせられた。

「まだまだ驚くのは早いぞ勝」

ディバイガンは言った。

「さて行くか!!」

マリンはアオリイカもどきに向かって突っ込んだ。

続く。

第3話 深海決戦！ ジャックトリオ！ - 04（後書き）

作「祝第10部！」

全員「おめでとう！」

勝「早いもんだね、以外に」

赤城「うん……なんかもう出番なくなってきたな」

作「いや、赤城君、君は中盤ぐらいで重要な役になるよ、紀香さんも」

赤城「初耳だ……」

紀香「あたしもよ……」

作「この二人の活躍をお楽しみに……次回もお願いします！」

マリン「俺達が大活躍だよ!!」

ドリル「よろしくね！」

タンク「意見感想もよろしくです！」

作「ちゃっかりあとがきに出てるよ……こいつら」

第3話 深海決戦！ ジャックトリオ！ - 05（終）

「ハアアア！！」

マリンが、超至近距離から肩に装備されているミサイルランチャーをアオリイカもどきに直撃させる。

「イカイカアアアアアアア！！！！！！！！」

アオリイカもどきは急な攻撃に驚く。

「まだまだだぜ！！ドリルクラッシュ！！」

ドリルが、右腕に装備されているドリルで、アオリイカもどきを、下から持ち上げる。

「イカアアア！！！！やめろイカ！！」

アオリイカもどきは叫ぶ。

「触手攻撃イカア！！」

アオリイカもどきは触手をドリルに向け伸ばす。

「デイバイショット！！」

デイバイガンの頭に装備されているバルカン砲を発射させ、触手に攻撃する。

「やめるイカア！」

アオリイカもどきは怒る。

「隊長！俺達兄弟のコンビネーション見てくれ！！」

タンクが叫ぶ。

「わかった・・・・・・・・・・」

勝は息を呑んだ。

「タンクラストだ！！！」

マリンが叫ぶ。

「OK兄貴！標準・・・・・・・・・・セット！喰らえ！！ジャアック
キャノオオン！！！」

タンクの肩にキャノン砲が装備され、砲弾が発射された。

ドガアアアン！！砲弾は見事にアオリイカもどきに直撃した。

「やったのか・・・・・・・・・・！」

勝はあまりの見事さに驚く。

「いや・・・・・・・・・・まだまだ！」

デイバイガンが煙を見つめる。

「イガガガガ！！まだイガ！！！」

イカの色が青から赤に変わった。

「ま、流石にそう簡単には倒せないよな」

ドリルが言う。

「兄ちゃん、次どうする？」

タンクがマリリンに言う。

「隊長！合体のご指示を！！」

マリンが勝に言う。

「ディバイガン、コードは……?」

勝はディバイガンに聞く。

「735」海底合体だ！！」

デИБাইガンが叫んだ。

「わかった！コード「735」……！！海底合体！！！！！！」

勝は叫んだ！

「了解!!!」

3人はそれぞれ潜水艦、戦車、ドリルタンクに変形する。

タンクとドリルが、まずタービンを用いて上方へ向かい、それぞれ腕に変わる。

一回り大きいマリンが上半身下半身、頭部を形成する。

「ジョイント！ドリルアンドタンク！」

マリンから強力な磁気が発生して、ドリルとタンクをこちら側へ呼び込み接合をする。

「あれが……3人の真の姿！！」

勝は合体した3人の姿を見て驚く。

「右手に戦車、左手にドリル、海底の平和守ります！……深海合体スーパージャック！！」

スーパージャックは海底に立った。

デイバイガンよりは、少し小さいが、頑丈そうな青いボディ、右手にはタンクのキャノン砲が装備され、左手にはドリルを装備されているそして胸部にはデイバイガンと同じ称号が^{エンブレム}付いていた。

「行くぞ！いか野郎！」

スーパージャックが構えを取る。

「イガイガ……！イカ墨ウイルス！」

赤くなったアオリイカもどきは墨の玉を吐く。

「無駄だ」

スーパージャックは頭についているタービンを回すと、渦潮が起きて墨を跳ね返す。

「イガガガ………触手イガ！」

触手がデイバイガンに向けられる。

「デイバイガン！破滅剣だ！」

勝が叫ぶ。

「了解！破滅剣！！」

胸の称号から、光が出て、剣を生成する。

「ハアアアアアア！！！！！！」剣を右手でしっかりと握る。

触手は見事に真っ二つに分かれる。

「イガアアアアアア！！！！！！」

叫ぶアオリイカもどき。

「スーパージャック！決めるんだ！！」

勝が叫ぶ。

「了解！！」
ミジャー

スーパージャックはそう言い舞い上がる。

「スーパージャックキャノンセット！！」

右手のキャノン砲を構える。

「標準セット・・・・・・・・！！」

「イガガガガ！！！！！！」

アオリイカもときは、触手を伸ばす。

「FIRE！！」

ドツヒューン！！！！！！！！というものすごい音を立てて衝撃波が発射された。

その衝撃波は、触手ごと巻き込んだ。

アオリイカもときはものすごい爆音を立てて爆発した。

爆発した中にまた、あの青い光があった。

デイバイガンは右手でしっかりと握り、胸の称号にしまい込んだ。
エンブレム

すると、左手の墨は落ちていた。

続く

第3話 深海決戦！ ジャックトリオ！ - 05（終）（後書き）

須田「今日はあとがき部屋には、破滅合体ディバイガンさんと、海底合体スーパージャックさんに来ていただいています。」

ディバイガン「どうも、ディバイガンです。」

スーパージャック「どうもスーパージャックです。」

須田「お二人ともとても大きいですね。あたしかお挙げ内と顔見えないですよ。」

二人「はははは」

作「というか、なぜこの二人呼んだの。」

須田「いや、かつこいいからですよw」

勝「と言うかさ、この二人ってさらに合体するの?」

作「いやしない」

須田「あっさり言っなよ。」

作「今回は設定資料編です。次回もよろしく願いします」

「ご意見ご感想お待ちしております。」

第3・5話破滅勇者 デイバイガンの秘密 - 01

人物設定

主人公：天下勝てんか しょう

池野上小学校4年生の少年。性格は内気ながらも勇気はある。
ひよんなことから、宇宙連合の部隊破滅勇者隊（バッダーズ破滅連
合勇者特別部隊）の隊長となる。

好きなもの ゲーム、カレー 嫌いなもの ナス

赤城浩次あかぎ こうじ

池野上小学校4年生、勝の数少ないよき理解者。
世界的企業の赤城コーポレーションの会長の一人息子。

好きなもの 正義、青春、ロボット 嫌いなもの 自分、お金

藤井紀香ふじい のりか

池野上小学校4年生、クラスの中ではアイドル的存在であり、勝と
は幼馴染。

勝が元気が無いといつも励ましてくれる。

好きなもの、アイス、甘いもの全般 嫌いなもの、勉強、汚いもの

ラクラス・バッダー

宇宙壊滅宗教組織バツダーズ教祖。宇宙を滅亡させ、一から宇宙を作り直そうとしている。

好きなもの嫌いなもの不明

機械超人編

ディバン

破滅勇者隊の副隊長。正義感が強く、平和をいつも望んでいる。戦闘中弱気になる勝をいつも励ます。戦闘機に変形可能。

装備 Dガン・・・腰に装備されている。ビームガン。

頭部バルカン砲・・・頭部に2個銃口がついている。

Dナイフ・・・膝部分に装備されている。75cmくらいの長さ。

イガール

破滅勇者隊隊員。異常にテンションが高く、周りに迷惑を及ぼす。非常にでかく、ディバンより一回り大きい。ダンプカーに変形可能。

装備 ギガクラッシュ・・・荷積み部分を、武器として使用する時の名前。右手に装備されている。

フィンガービーム砲・・・指からビームを出せる。

ディバイガン

ディバンとイガールが破滅合体をすることで完成する超機人。
胸にはHYの文字が書かれた称号^{エンブレム}がついていて、そこに、人の魂を

収納する。

装備 デイバイショット・・・頭部に装備されているバルカン砲
ギガクツラシユパンチ・・・ギガクツラシユを拳に装備させ、
相手に鉄拳を喰らわせる。

破滅剣・・・デイバイガンの必殺武器。胸の称号から生成す
る。とても頑丈で、簡単に折れない。
エンブレム

ジャックマリン

破滅勇者隊隊員、水中戦のプロフェツシヨナルジャックトリオの長男。

弟達から兄ちゃんと慕われている。潜水艦に変形可能。

装備 ショルダーミサイル・・・肩に装備されているミサイルランチャー。

マリンタービン・・・頭部に装備されている。これで水流や風を起こし攻撃を跳ね返す。

ジャックドリル

破滅勇者隊隊員、ジャックトリオの次男。

通常は、兄マリンの中に搭載されている。陸上でも活躍できる。ドリルタンクに変形可能。

装備 ギガドリル・・・右手に装備されているドリル。これをいろいろな方法で扱うので、技が多い。

ジャックタンク

破滅勇者隊隊員、ジャックトリオの三男。
末っ子ながらも兄達には負けない正義感、優しさを持つ。戦車に変
形可能。

装備 ジャックキャノン・・・右手に装備されているキャノン砲、
威力は十分。

スーパージャック

ジャックトリオの3体が、海底合体をして完成する超機人。
水中戦に滅法強く、水中ならディバイガンを凌駕する。

装備 スーパーギガドリル・・・右手に装備されているドリル。
ショルダーミサイル・・・肩に装備されているミサイルラン
チャー。

マリンタービン・・・頭部に装備されている。これで水流や
風を起こし攻撃を跳ね返す。

スーパージャックキャノン・・・スーパージャックの必殺武
器、右手に装備している。

相手編

石像

バッダーズの魂たちが、石像に取り付き生まれた。
その体からは想像できない機動性を持つ。口から衝撃波を出せる。

アオリイカもどき

アオリイカに、バッダーズの魂が取り付き生まれた。

やたらと「イカ」を付けて話す。触手攻撃を得意とする。口から相
手の動きを止める「イカ墨ウイルス」を発射する。

これからもつと強力な相手が来るぞ．．．．．！！！！
頑張るのだ！破滅勇者隊！

第3・5話破滅勇者 デイバイガンの秘密・01（後書き）

次のお話

遠足で、動物園に来た勝とクラスメイト達。

そんな中でもバッダーズは襲撃をしてきた。

なんと次の敵は・・・パンダ？

次回 第4話 パンダパニック！

作者「あ・・・肩痛い。（本当です）」

勝「どうしたんだよ？」

作者「寝違えてさ・・・痛てて。」

勝「日頃の行いが悪いんだよ・・・。」

作者「何か言ったかな？？」

勝「いえ、何も申し上げません！」

作「そ・・・次回もお願いします。」

勝「いつか・・・おれが・・・ぶつぶつ」

ご意見ご感想お待ちしております。

第4話 パンダパニック - 01

アオリイカもどきの戦いから5日過ぎた。

どうやらバッダーズは毎日でなく、間隔を空けて攻めてくることが勝はつい最近わかった。

勝は教室の外をボーッと見ていた。

教室内では明日に迫る遠足でどこに行くか話し合われていた。

「絶対！アドベンチャーパーク！！」

男子が手を上げながら叫ぶ。

「いいえ、そんなとこ女子がつまらないですわ！絶対に動物園！」

女子がそれに抵抗するように手を上げ叫ぶ。

勝はそんなどうでも良くただ外を見ているだけだった。

「えーーーーー静まれ静まれ！！」

担任の岡崎おかざきが、遠足の目的地について決めるのに盛り上がるクラスを何とか静めた。

「ではこうしよう！多数決！このクラスは、男子12、女子12・・・あ・・・割り切れちゃうかまあやってみよう」

全員岡田の話を聞き賛成をした。

「じゃあ、アドベンチャーパークがいい人！」

勝を除く男子11人が手を上げる。

「次に……動物園！」

女子12人が手を上げる。

「じゃあ……どっちでもいい人！」

勝がやる気なさそうに右手を上げる。

「勝！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

男子が一斉に叫ぶ。

「じゃあ12対11棄権1で、動物園に決定となります。」

岡田がそう宣言すると、女子から歓声が上がった。

「勝……お前なんで……」

赤城が言う。

「いや、どっちでも良かったもん」

勝は普通に本音を言った。

男子達は諦め勝たちのクラス遠足の目的地は動物園になった。

翌日 集合場所は上野駅、そう目的地はかの有名な上野動物園である。

この上野動物園に最近パンダの親子王王わんわんと蘭蘭らんらんが中国から来たことで話題になっていた。

「どこどこ？私の蘭蘭らんらんちゃーーーーーーーーん」

紀香が目を輝かせて、動物園を歩く。

そんな紀香を見て、勝と赤城は溜息をつくことしかできなかった。

勝がふと周りを見ると、以外に面白い動物達がいた。

器用にバナナの皮をむき、それを食べるサル達。

長い鼻を器用に使う象。……………なんだかんだ言って楽しそうだな、勝は、動物園がなんとなく楽しかった。

そしてパンダゾーンに到達、女子達がいつせいに鞆からデジタルカメラを取り出す。

その姿を見る男子達は何も言うことができない。

そして、とうとうパンダたちの目の前に勝たちが着いた。

と思ったらパンダの親子はどうやら、裏の方で昼寝しているらしいなかった。

「そんなあ~~~~」

一気に女子のムードが盛り下がる。

そのまま勝たち一行は、広場で昼食する事になった。

「ああ……パンダ……らんらん蘭蘭ちゃん……」

紀香は、口だけ動かして手の箸が全く動いてない、よっぽどショックだったらしい。

「そんなに落ち込むことなのか？」

赤城が紀香に言う。

「ええ……、もう楽しみで昨日眠れなかったのよ……
・それなのにさ……」

あちこちで女子の溜息が漏れる。

すると、プルルルと言う音がした、どうやらカイザーモバイルが鳴っているらしいが、勝以外の人は聞こえないらしく、全く反応しない。

勝は、トイレに行くといい、カイザーモバイルに出た。

「ディバン……？僕だよ」

勝が言うと、ディバンの声がした。

「ディバンだ、バッダーズがどうやら襲撃に来たらしい」

「場所は・・・・・・・・・・？」

勝が聞く。

「上野動物園らしい・・・・・・・・」

と言うディバンの声に勝は「へ？」と言う力の無い返事をした。

すると、地響きがして勝は思わず少しバランスが崩れた。

パンダゾーンの方から轟音がしていた。

「ディバン早く来て、俺今上野動物園にいるよ・・・・・・・・、デツカイパンダが暴れているよ・・・・・・・・」

勝は動物園内に突如現れた巨大パンダを見て、ただ笑うことしかできなかった。

続く。

第4話 パンダパニック - 01 (後書き)

須田「あゝん、か・わ・い・い」

紀香「かつわいい」

勝「なにかわいい連発してんの？」

ディバン「あのパンダではないか？」

勝「あ．．．．．パンダの蘭蘭じゃん」

作「あ．．．．．そいつ今回の敵だよ」

勝「そうなんだ」

須田「作者さん今なんと申しましたか？」

作「へ．．．．．!!」

紀香「いま、この蘭蘭ちゃんが．．．．．敵だと？」

作「あ．．．．．その．．．．．すいません!!．．．．．いやあああ!

!!!!」

次回もよろしくお願いします。

感想、ご意見待ってます。

第4話 パンダパニック - 02

突如動物園に現れたパンダは、ただ座って、ボーっとしているだけで、何もしていなかった。

「アイツ・・・・・・・・・・何もしないのか？」

勝は巨大パンダを見て、ディバンたちを待っていた。

「何なんだあれは・・・・・・・・・・？」

池野神小学校の生徒達は巨大パンダに呆気を取られていた。

そんな中、女子達は、巨大パンダを見て、パニックではなく興奮し始めた。カメラでパシャパシャ撮ったり、近くに行ってみたりするものがいた。

「うおおおおおん！！」

急に巨大パンダが叫んだ。すると、その音響で、町の建物が壊れ始めた。

「・・・・・・・・ガタガタ」

赤城は恐怖に襲われていた。自分に住む世界に、こんな生物がいるなんて夢にも思っていなかったからである。

赤城はただ逃げ出すことしかできなかった。周りでは、建物の残骸の下敷きになり苦しんでいるものが多くいる。赤城は自分の無力さ

を痛感した。

そんな赤城の前に一人の少女が倒れこんでいた。

「大丈夫か………？君？」

赤城は少女に勇気を出して声をかけてみた。

「……………う……」

少女はわずかながら返事をしていた。

助けなければ！赤木は、少女をおんぶし、歩き始めた。

すると、パンダがまた叫んだ。

「ぶおおおおおおおおおおおおん！！！！！！！！」

さらに建物が壊れる。

赤城が上をふと向くと残骸が落ちてきていた。

（マジかよ！！）赤城は焦った。赤木は死を覚悟した。

（そうだ……………この子だけでも救わないと……………！！！！！！！！！！）

赤城は、少女を残骸が落ちてくる範囲まで投げ出した。

「生きてくれよ……………」

赤城はそう言うと、目を瞑り静かに笑った。

人を一人救えただけでも良かった……。。良かった……。

しかし数十秒経っても残骸は落ちてこない。赤城は不思議に重い目を開けた。

そこには、残骸を受け止める大きな掌が赤城を守る様にあつた。

「……………!!あの時の巨人」

赤城は思わず腰が抜けてしまった。

「ディバン、遅いよ!!」

勝は怒るようにディバンに言う。

「すまなかった……、今回は反省しているよ」

ディバンは申し訳がなさそうに言う。

「よし!ディバン怪物退治を始めよう!!」

「ああ……………」

「ブレイブフュージョン!!」

勝はカイザーモバイルを差し込んだ。

勝は光に包まれコックピットにワープした。

「・・・・・・・・行こう!!」

勝は言った。

「よし! D ナアイフ!!!!!!」

ディバンは足の部分からナイフを2本取り出し両手にしっかりと握った。

「行くぞ! バッダーズ!!」

ディバンは背中のブースターを点火させて、上空に飛び、日光を影に巨大パンダへ突っ込んだ。

「喰らえええええ!!!!!!」

ディバンは叫びながら2本のD ナイクで突っ込んだ。

D ナイクが巨大パンダに思いっきり刺さった。

「うおおおお!!!!!! 何がしたが!!!!!!」

巨大パンダがにやけながらディバンを見た。

そしてディバンをつかみ放り投げた。

思いっきり地面に叩きつけられた。

勝は、巨大モニターから巨大パンダを見たすると、D ナイクが刺さ

ったはずの傷口がだんだんと治ってきていた。

「うおおおお！！俺には攻撃は何も効かない！」

パンダはよだれがだらだらの口を思い切りにやけさせた。

勝は、それを見てどうすればよいのかわからなかった。

続く

第4話 パンダパニック・02（後書き）

赤城「今回俺大活躍だな〜」

勝「嬉しそうだね赤城」

赤城「だってよ・・・1話から搭乗してんのにさ、全く活躍してないんだぜ・・・」

勝「あ・・・そういや、そうだね」

紀香「それなら私だって!!」

須田「私もよ・・・もうここだけしか出番無いわ!」

作者「・・・・あははは」

ディバン「笑ってごまかす・・・・、このようになってはいけない・・・・」

次回もよろしく願いします&意見感想よろしく願いします。

第4話 パンダパニック - 03

「うおおおおおん!!」

巨大パンダはまた叫んだ。

地面が大きく揺れる。町にいる人々の叫び、悲鳴が勝の耳に入ってくる。

「クソ!クソクソ!!どうすりゃいいんだよ!!」

勝は、何も手段が無いこの状況に腹が立っていた。

「勝!ただ、Dナイフが効かなかったただけだ!Dガンとか効くかもしれないだろう!」

「そんな訳無いだろう!Dナイフも効かなきゃ、Dガンなんか効くわけ無いじゃないか!」

勝が反駁する。

「わからないではないか!!やっても無いのに誰がそう決め付けたんだ!」

デイバンも反論する。

「じゃあ、やってみろよ!」

勝はだんだん怒りが増してきた。

「Dガン！・・・シュートオ！！」

デイバンはDガンを取り出して、引き金を引いた。

ものすごい音を立てて衝撃波が巨大パンダに向かって放たれた。

「そんなもの！！」

巨大パンダは右手を出し、それを受け止めた。

「・・・くっ！！」

デイバンはDガンをしまった。

「どうすりゃあいいんだよ！！」

勝は自分の拳をコックピット内の機械を思い切り殴った。

赤城は少女を抱きかかえながら避難用地下地域に向かって必死に歩
きつつ、デイバンと、巨大パンダの戦闘を見つめた。

「あの巨人の攻撃がパンダに効いてない・・・」

赤城はそう呟いた、すると背後から今まで見たことも無い巨大なダ
ンプカーが迫ってきていた。

「うわあ！！」

赤木は驚いたようにダンプカーを避けた。

「何なんだあれは……?」

赤城は巨大なダンプカーを見て自分の目を疑った。

「ディバン! すまない遅くなったぜヒヤアハ!!」

イガールが右から轟音を立てて、増援に来てくれていた。

「イガール!! 勝、破滅合体だ!!」

ディバンが叫ぶが、勝は無反応であった。

「勝……? どうした?」

ディバンが心配そうに聞く。

「あいつ何も効かないから……ディバイガンになっても意味無いよ……」

勝が真剣な顔をして言った。

「さっきも言っただろう! まだ可能性があるんだからやってみなければわからないだろう!」

ディバンが必死に説得する。

「…………嫌だ、意味無いもの…………」勝は下を向いた。

「ブレイブ・リープ…………」

勝はそう言い、カイザーモバイルを抜き、コックピットから抜け出した。

「勝…………!!」

ディバンが驚いたような声で話す。

「今回は相手が悪すぎるよ……………」

勝は相変わらず顔を上げない。

「……………」勝はそのまま黙り込んでしまった。

「くう！勝のカイザーモバイルが無いと、破滅合体ができない…………、仕方ない、イガールフォーメーションDⅠだ！」

ディバンがイガールを見て言う。

「了解！」

イガールはそう言い、右手に装備されている積荷部分を攻撃モードに設定した、巨大パンダに向かって走り出した。

「喰らえ！正義の一撃ギガクラッシュウウウアアアアアア！！！！！！」

青白い光に包まれたギガクラッシュで巨大パンダ殴った。

「グフフフウウ！！！！」

巨大パンダは一向に笑っている。

「……………喰らえ！Dナイフ十字斬りiiiiiiii！！！！」
「！」

2本のDナイフで、巨大パンダを従事に巨大パンダを切り裂いた。

「どうだ！！」

デイバンが巨大パンダを見つめる。

「ぐうううう……………うおおおおおお！！！！！！」
「！」

しかし巨大パンダの体は修復された。

「く……………やはり駄目なのか？！」

デイバンは、Dナイフを構えて呟いた。

赤城はとうとう避難用地下地域の目の前に着いた。

すると、赤木の背負っている少女が急に呻き始めた。

「・・・・・・・・!!どうした・・・・・・・・?!」

赤木が心配そうに聞く。

「パ・・・・・・・・ン・・・・・・・・」

少女が何か呟いている。

「何だつて?!」

赤城は聞き返す。

「パングアアアアアアアア!!」

少女は強引に赤城の背中から飛び出した。

赤城は少女の姿を見て驚いた。頭からは黒い耳が生え、目の周りが黒い丸で囲まれていた。

「グルルルルル!」

少女は、赤城を睨んでいる。

「マジかよ・・・・・・・・!!」

赤城は構えた。

「ウガアアアアアア!!」

少女が赤城目かけて襲い掛かってきたのであった。

続
く

第4話 パンダパニック・03（後書き）

赤城「うわゝ、俺絶体絶命じゃん！」

勝「……………そうだね、俺なんて……………」

デイバン「そうだな、我らの敵なんて攻撃効かないし……………」

須田「勝てないんじゃないですか？」

勝「そんなこと言わないでよ……………、一応頑張ってるんだから！
」

紀香「でもあんた、ブレイブリーブしているじゃない」

勝「それは……………その……………作者のせいだよ」

作者「俺のせいだよ！！」

次回もよろしくお願いします。

意見感想もよろしくお願いします。

第4話 パンダパニック - 04

「グルルルルル!!!」

少女の目つきも変わっていた。

赤城の呼吸が荒くなってきたことが自分でもわかっている。一応これでも3年前から空手をはじめているが、そんなものが今の場で生かせないことがすぐわかった。

そして次の瞬間少女が、人間の技とは思えないものすごい跳躍力で赤城の懷に潜ってきた。

赤城の腹部に少女の拳が強く入る。

「ガハ……、くそお……」

口から血がにじみ出していた。赤城はそれを袖で拭き、右手で体を支えながらゆっくり立ち上がった。

「ハア……ハア……」

息が荒くなる。落ち着こうとするが、いつ攻撃されるか不安で深呼吸ができない。

相変わらず少女は、両手両足で獣のように立って、赤城を見つめていた。

ディバンたちは何度もいろんな方法で巨大パンダに対して攻撃を繰り返していた。

「ハアアアアアア！！！」

超至近距離で、Dガン撃つものの、巨大パンダには全く効果がない。

イガールの体もディバンの体も限界に近かった。

「クソ……！負けるわけにはいかん！」

ディバンはしっかりと、Dナイフを右手に、Dガンを左手で握り再び巨大パンダへ向かった。

勝は、ディバンの中から外を見つめていた。何故、敵うはずも無い敵にここまでするのか？勝には全く理解ができなかった。

すると、町の風景をふと見ると勝のクラスメイト達が必死に避難しているのを見つけた。

瓦礫の溢れる道を担任の中崎が必死に先導し歩いている。今にも女子達は泣きそうである。

勝はそれをただボーっと見ていただけであった。すると、パンダが急にまた叫び始めた。勝の耳が破れそうな爆音である。

叫び終えたらしく、勝が目を開けると予想もしなかった光景が勝の目に映った。

クラスメイト達が、瓦礫の下敷きになっているのだ。どうやらさっきの叫び声でまた建物が崩壊し、落ちてきたのであろう。

勝はそのまま違うところに視点を移したが、何か心に引っ掛かっていた。

このもやもやは何なんだろうか……。勝には全くわからなかった。

瓦礫に埋もれた友達を助けるために必死に紀香は、瓦礫をどかしていた。

「皆！大丈夫??」

すでに目には涙が溢れていた。下敷きになっている少女達もそうである。

紀香は、全く筋力がなさそうな白い綺麗で細い腕をフルに使い、瓦礫をどかすのを頑張っているが、そんなに簡単にどくはずが無い。

紀香は、どうすることも無くへなへなと地面に座り込んでしまった。

勝は再びカイザーモバイルを右のズボンのポケットから取り出した。

友達を助けなければ！！その心が勝の心の中に芽生えたらしい。

「ブレイブ・フュージョーン！！！」

勝はカイザーモバイルを差し込み再度コックピットにたどり着いた。

「勝！！！」

絶体絶命の中、勝が帰ってきたことにディバンは、驚いていた。

「ディバン！イガール！行くよ！」

勝が二人に呼びかける。

二人は静かに頷いた。

「コード「821」！！破滅合体！！！」

勝が叫びカイザーモバイルを差し込んだ。

「「^{ラジャー}了解」」

イガールと、ディバンが上空で破滅合体を行った。

「破滅の力。今解放するとき也。破滅隊副隊長！！破滅合体ディバイガン！！！！！」

ディバイガンは静かに背中のブースターを使って地上に降り立った。

「ディバイガン、奴と戦闘する前にひとつ聞いて欲しいことがある。

「

勝の意外な発言にディバイガンは驚いた。

「何だ……？勝」

「あその瓦礫に埋もれている僕の仲間を助けて欲しい」

勝が言うと、静かにディバイガンは頷き、瓦礫をどけた。

そこにいた紀香は、涙を流しながらこちらを見つめていたのが勝にわかった。

勝は自然と勇気がわいてきていた。

続く。

第4話 パンダパニック - 04 (後書き)

紀香「ねえ、勝」

勝「あとがき部屋の最初に唐突になんだよ紀香？」

紀香「あんたの持っているカイザーモバイルってあるじゃない」

勝「ああ、これ？」

紀香「それって、ディバンたちとフュージョンする以外になんか使い道あるの？」

勝「実はね……………」

紀香「うんうん」

勝「わかんない？」

紀香「……………しになさい勝」

作（一応ありますが、それはまたの機会に…………）

次回&感想意見宜しくお願いします。

第4話 パンダパニック - 05

勝は友達が助かったのを見て、ホッとした。

そして、目の先を巨大パンダにへと変更した。

「グルルルルルル・・・貴様ら、俺を無視して、人助けだど？
！」

巨大パンダは自分を無視されたことに腹を立てているらしい。

「お前にはわからないだろうな！仲間の大切さを！俺は、貴様とは違うところがひとつある！」

「何だと・・・？？」

巨大パンダは目を細める。

「俺には助けなければならぬ人たちがいる！貴様はただ破壊と殺戮しか望んでない！それだけだ！！」

そういうと、ディバイガンは上空へ飛んだ。

「ガルルル・・・うるさい！！」

巨大パンダは、ディバイガンのほうを睨んでいた。

「喰らえええ！！」

上空から勢い良くディバイガンが、左拳を振りかぶり突っ込んできた。

ぶつかる寸前にディバイガンは右手を突き出した。

「しつこい!!」

その拳を巨大パンダは掴んだ。

「まだまだ!!ギガクラッシュパUNCH!!!」

次にギガクラッシュが装備された右手で巨大パンダに殴りかかった。

ドガ!!と言う音を立てて、巨大パンダの頭がつぶれた。

「グルルルルル………しかあゝし!!」

見る見るうちに巨大パンダの頭部がゆっくり確実に修復されていった。

「諦めが悪い奴はもてないのを知らないのか?グフフフフ」

巨大パンダは赤く光る目を輝かせ笑った。

「ディバイガン!諦めないで、どんどん攻撃をしよう!」

勝が巨大パンダを見て叫ぶ。

「了解!……破滅剣!!」
ラジャー

ディバイガンの^{エンブレム}称号から、黄色い光が出てきた。

赤城の顔は、突如凶暴化した少女の攻撃によりアザだらけで、既に左目は開かなくなっていた。

「クソオ……！」

赤城はふらつきながらもしっかりと立っていた。

そんな赤城を見て少女はさらに唸り声上げる。

赤城は、両手で自分の両頬を叩いて、気合を入れた。

（僕が何とかするしかない！！）赤城は開く左目をしっかりと見開き少女を見つめた。

少女は痺れを切らし赤城に襲い掛かってきた。

「来た……！」

赤城は全神経を集中させて、間一髪少女の殴りかかってくる右手を避けた。

少女は、着地するなり華麗なステップで、方向を変え殴りかかってきた。

「甘い……！」

赤木はしゃがんで避けた。

「女性を殴るのは気が進まないが……!!」

しゃがんだのを利用し全身のバネを使い、少女の腹部めがけ拳を突き上げた。

「グフファ……!!」

少女の口から血が吹き出る。空中でバランスを崩したので少女は着地に失敗した。

「はぁはぁ……」

もう赤城は自分で立っているのが不思議なくらいであった。

赤城は、倒れこんでいる少女を見つめる。もう立たないでくれ……こっちももう限界なんだ……赤城はそう思っていた。

しかし、少女は両手で踏ん張りながら立ち上がった。

「もう駄目だ……」

赤城は、力尽きその場に座り込んでしまった。

赤城は巨大パンダと戦うデイバイガンを見つめた。

「俺も一回で良いからあれに乗ってみたかったな……」

赤城は笑いながら言う。

赤城はゆっくり視線を少女に戻した。

少女は先ほどとは違い2本足で立っていた。なんかパワーアップでもしてしまったのか？赤城は不安になり、少女から遠ざかるうとした。

「待ってください！！」

少女が呼び止める。

明らかにさっきまでの少女とは違った。目も優しい感じになり、口から牙も出ていない。どうやら元に戻ったのだと、赤城は確信した。

「すいません……………私のせいで……………こんな姿に……………」

少女は目から大粒の涙を流し、赤城の目の前に座って謝った。

赤城は謝る少女の肩に手を置いた。少女は顔を上げる。

「いいんだよ……………。君を守れたから……………」

笑顔でそう言い、疲れ果てて寝込んでしまった。少女は、赤城と肩を組み、避難用地下地域に向かって歩き出した。

「クソオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

ディバイガンが、横から水平に巨大パンダを破滅剣で切る。しかし、何度も斬りつけてもやはり修復されてしまう。

勝の顔に焦りが出てきた。

一方助けられた紀香達は、避難用地下地域に向かって歩いていた。

紀香の友達の少女たちはさっきから吐き気や、寒気を訴えていた。

「大丈夫だ！もうすぐ手当てを受けられる！」

岡崎が必死に励ますものの、以前に顔色が悪い。

そして、異変が起きた。

「キャアアアア！！」

女子の叫びが聞こえた。一同その叫び声がしたほうを見た。

先ほどまで吐き気を訴えていた男子が猛獣のように暴れまわっていたのである…………。

続く

第4話 パンダパニック・05（後書き）

赤城「俺今回頑張ったな」

勝「俺今回あんま出てないや……」

作者「今回は赤城君中心のお話のつもりだったから……」

紀香「あたし中心のお話ってないの？」

須田「そうよ！あたしのも……！！」

作者「え……と、次回も宜しく願いします！！」

須田、紀香「話をこまかすな！！」

次回&意見感想お願いいたします。

第4話 パンダパニック - 06

「ちよつと．．．いやあああああ！」

少女達の叫び声がする。

急に暴れ始めた少年は誰も関係せずとにかく目に入ったらひたすら襲っていた。

病弱の彼がこんなに素早い動きができるはずが無い。

紀香は、冷静に考えていた。自分達の身の回りいま何が起きているのか．．．．、何が原因なのか．．．．。

「ウグルアアアッアア！！！！」

牙が生え、目が赤く光る少年が、紀香は自分自身に襲い掛かって来るのを見た。

駄目．．．避けられない。思わず紀香は目を瞑る。

しかし噛まれた感覚が無い．．．．。紀香は恐る恐る目を開けた。

少年はクラスの中でも運動神経がいい野洲崎やあしきが必死に抵抗していた。

「藤井！ここは男子に任せてどっかの物陰に隠れてろ！！」

野洲崎達男子は女子達にそう言いながら暴れ狂う仲間を殴って落ちて着かせようとしている。

紀香は頷き腰が抜けている女子達を何とか立たせその場から逃げた。

「行くぜ！！馬鹿野郎！！」

野洲崎のきつい一発が暴れ狂う少年に直撃した。

「あああああ！！」

勝の額には大粒の汗が洪水のごとく溢れ出ていた。

今までこんな長時間ディバイガンに搭乗した事が無いので、身体的にも疲れが出てきていた。

「勝大丈夫か？！」

ディバイガンが、勝を心配そうにしている。

勝は声を出すのもつらい、頷くことしかできず、息も荒い。

勝は汗でぬれた前髪のすきまから相手を見る。

何故効かないんだ？こんなに攻撃したんだぞ……勝は、全く理解ができずどうしようもない気持ちになった。

「勝……」

ディバイガンの声も弱弱しくなる。今回は無理なのではないか・・・
・・・この敵こそが・・・ラクラス・バッダーなのでは？勝の心に色々な思い疑問が生まれてくる。

「絶対に・・・負けない」

勝の目はもう勇者の目そのもの、目の中に正義の炎が燃えていた。

「タンク・・・、こちらマリンだ、どうだ？」

マリンたちは横浜にいた。

何かを探す様に首を左右に大きく動かす。

「駄目だよ・・・全く見つからない」タンクから返事が来る。

「こちらドリル、全く例の物らしきものなしだぜ、兄ちゃん」ドリルからの通信も入る。

「うゝむ・・・勝隊長たちが、戦っているのに・・・あれを見つけないと意味が無いのに・・・」

マリンの声は困っていた。

タンクが再び左右に首を動かし始めると、それはあった。

「兄ちゃん！あったよ！」

「本当か?!」マリンと、ドリルがビーグルモードでやってきた。

二人はそれを見て、お互い頷きあった。

「間違いない……、奴の核だ!」

マリンは言っと、頭のタービンを回し始めた。

ヒュオオオオオ!というものすごい音を立てて、風が起こる。マリンの頭から発射され風は、突風いや、竜巻になりそれに向かってまっすぐ向かっていく。

ものすごい音が響いた。

茶色い砂煙が舞う。3人とも警戒するように構える。

舞った砂煙が晴れたので、3人は目を凝らし相手の存在を確認する。どうやらそれは完全に終われたようであった。

「タンク!任務は終わった!!隊長に通信を致すんだ!!」

「グウウウ」

勝の疲労がピークに達してきた。口からは少し血が出るのが自分自身でもわかる。

もう駄目なのか…….…….と思っていたそのときカイザーモバイルを通し、ジャックトリオのタンクの声が聞こえてきた。

「隊長！！聞こえますか！！タンクです！！」

タンクの声に勝は聞こえるかわからない微小の声で必死に答えた。

「奴の核を壊しました！！もう攻撃が効きます！！」

タンクの声を聴いた瞬間勝の目は驚いたように丸くなった。

「どういうことだ？」

デイバイガンが聞いた。

「どうやら奴は、自分の周りの無敵バリアを生成する核を自分で、東京から距離のある横浜に隠してたらしいです！」

タンクがしっかりと説明をする。

「勝！！反撃のチャンスだ！！」

デイバイガンの声が明るくなる。

勝は静かに頷き精神を統一し始めた。

野洲崎は、異変に気づいた。先程まで猛獣のような牙、爪、そしてパンダのような目の周りの丸、赤く光る目がなくなっていたのである。

る。しかも先程とは動きが遅くなっているのである。

この隙に野洲崎たちは鳩尾みぞおちに拳をいれ、少年を気絶させた。

「・・・・・・・・ふうゝ何とかなったか・・・・・・・・」

体中に傷を作った野洲崎は、静かに眠りに着いた。

続く。

第4話 パンダパニック・06（後書き）

最近眠い作者です。

ちゃんと寝ないのが悪いのですが……………。

勝君って、思えば勇者シリーズの中で一番勇気が無いような感じがしている今です。

この作品を書く上で自分自身に対して正直になれます。

もうマルスマンによる勇者シリーズの次回作の案が出ております（まだ、ディバイガンは終わりませんよ）

こんな奴ですが、これからもよろしくお願いします。

勝「なんで、今回こんなに真面目なんだ……………」

須田「……………さあ？」

第4話 パンダパニック・07（終）

とうとう、巨大パンダの秘密がとうとう解けたのである。

勝は、少しだけ体力が回復した。勝は、額の汗を袖でふき取った。

「ディバイガン、やれるよね？」

勝が笑顔で話す。

「当たり前だ！」

ディバイガンが話す。

ディバイガンは、強く右手の破滅剣を握った。

勝は深呼吸をし、ゆっくりと吐くと目つきを変えた。

「行くぞおおおお……！」

勝の叫びとともにディバイガンは空中へ飛んだ。

巨大パンダの顔には焦りが見えている。勝はチャンスと感じている。

ディバイガンが、日の光を背に巨大パンダに向かって破滅剣を振った。巨大パンダは右手と左手を両方出し、完全防御の体制をとる。

「うおおおおお……！」

勝の叫びとともに破滅剣の威力が増す。

巨大パンダの手からじわじわと血が吹き出てくる。

「ウググググググ………」

巨大パンダの小さいうめき声が勝の耳に入ってくる。

バアン！！という音がして、ディバイガンの破滅剣は跳ね返されてしまったものの、攻撃を与えることができた。

「やはり………硬いな」

ディバイガンは破滅剣を見つめながら言う。

ディバイガンの言葉を聞き勝はズームを使い、巨大パンダを見る。確かに傷はつけているが、あまり効果がなさそうだ。

「ディバイガンー気に決めよう！！」

勝が叫んだ。

「わかった！！」

ディバイガンは右足を踏ん張らせた。

背中 of 銀の翼（ジェット機の羽翼部分）が、輝き始める。

ドッヒューン！！ディバイガンが勢いよく上空へ舞い上がる。

「ウグググググ……パンダ砲!!」

右手を目の前に付きだし、すると黄色く光り始める。

「喰らえ!!」

パンダはにやけながら叫んだ。すると、黄色い衝撃波が放たれた。

「石像のときと同じものなのか？」

ディバイガンは、右手に装備されている積荷部分を前に出す。

ドガガガガガガン!!ものすごい音を立てる。

ディバイガンはだんだんと力押しされる。

（あの時のと威力が全く違う……、こっちの方が強力じゃないか……）ディバイガンの顔が歪んでくる。

「くっそおおおお!!!!」

勝は必死にレバーを握る。体験したことも無い衝撃に勝の体はもう限界を超し、これ以上はきつい状況だった。

そして、ものすごい爆音を立て、ディバイガンは地面に叩きつけられた。

勝は意識が朦朧もうろうとしている。どこに落ちたのかさえよく見えない。

「……………んばれ……………」

勝の耳にふと不思議な声が聞こえた。いや違う、勝の頭に直接入ってきている。

「がんばれ．．．．．勝」

勝は重たいまぶたを必死に開けた。モニターに写っていたのは、紀香であった。紀香は、両手を握り必死に何かを願っていた。

（そうだ．．．．．僕は戦わなければならない．．．．．愛する人達を守るため．．．．．やるんだああ！！）

．．．．．ドクン．．．．．

．．．．．ドクン．．．．．ドクン．．．．．

目を瞑ると、神経から自分の心臓の音が聞こえる。とても静かでも綺麗な音である。

ボオオオオオオオ！！！！ディバイガンの4つに伸びた金の角が8つに分かれる。

「ディバイガンシャイニングモード！！！」

ディバイガンの姿は黄金色に輝いていた。

「これは・・・・・・・・・・・・・・・・？」

勝は急なディバイガンの異変に気づく。

「君の勇気が・・・勇気の力が限界地を超えたんだ、これが真の勇気のだ！！」

勝は、暖かい気持ちになった。モニターを通し見る巨大パンダを今なら倒せる気がしていた。

ピリリリカイザーモバイルが電子音を出したので、勝はカイザーモバイルを開いた。

そこには、「DLIB A I G A N E A b r i n g i n g s u
r e d e a t h m o d e c o r d 5 6 9」と書かれていた。

やるしかない！勝はコードを入力し、差し込んだ。

「必殺モード確認！！」

ディバイガンが叫ぶ。

キュオオオオオン！コックピット内の各部にメーターを現す画面が出て限界地に達し始める。

「破滅剣！！エボリューション！！」

両手で持つ破滅剣が輝き始める。

「剛・破滅剣！！」

輝きがやみ現れた剣は、太く大きく赤く輝いている。

デイバイガンは上空へ飛ぶ。

「この野郎！！！」

巨大パンダは再び右手を突き出して、パンダ砲を放つ。

しかし、黄金色に輝くデイバイガンには全く効果が無い。

「無駄だ！無敵の勇気の力喰らえ！！！」

デイバイガンは上空へ剛・破滅剣を伸ばす。

「剛・破滅剣！！雷空裂空波！！！！！！！！！！」

雷が剛・破滅剣に集まる。そして、デイバイガンは背中のブースターを点火させて、巨大パンダに向け突っ込み始める。

「十文字斬り！！！！！！！！！！」

ザシュ！！むごい音を立てて巨大パンダは十字に切られた。

デイバイガンが地上に着くと、輝きはやんだ。

「デイバイガン今のは……………？」

勝にはあの力がまったく理解ができなかった。

「君の勇気の力さ……2分しか持たないけどね……」

「
ディバイガンは疲れた声で答えた。

勝は何かに気づいたようにモニターを見た。紀香達は全員気絶していた。

それを見て、勝は安心してブレイブ・リーブをし、ディバイガンから降りようとした瞬間であった。

「……勝!!!!!!」

誰かが自分の名を呼ぶ声がした。

勝は驚いたように声の方を見た。

そこには包帯などで手当てを受けていた赤城がいた。

勝は自分がディバイガンの操主ということが赤城にばれてしまった。

続く。

第4話 パンダパニック・07（終）（後書き）

次のお話

勝が乗れて、何故自分が乗れない……………

赤城は、勝に対して自分が機械超人に乗れずに嫉妬してしまう。

そんな時にバツダーズが現れる。今回の敵は空の覇者の鷹。

全く歯が立たない勝、デイバイガン、スーパージャックトリオ。

そして、赤城の叫びに今勇者が目覚める。

次回 第5話 赤城正義の価値とは？

赤城「あ……………ばれちゃったね。」

勝「うん、どうなるんだろつか……………」

須田「今後が気になりますねw」

作者「まあ17〜20話位で終わらせるつもりだからね……………」

勝「ふ〜ん、で須田さんに今後活躍の場は？」

須田「ドキドキ……………」

作者「ないに決まってんじゃない!」

勝「え・・そんな・・・って！須田さんちよ、まだ死んじや駄目だって！！おい作者！！」

作者「次回もよろしくお願いします」

勝「おい！！」

意見感想お待ちしております。

第5話 赤城正義の価値とは？ - 01

『お父さん見て！カッコいいでしょう！！』

少年は父にロボットを見せる。

『本当だ・・・、かつこいいじゃないか』

父は笑顔で話す。

『僕ね大きくなったらロボットに乗って、ちきゅうをすくうんだ！』

『そうか・・・浩次！頑張って地球を守るんだぞ！』と言い、小さき日の赤城を抱いた。

小さき日の赤城は笑顔で頷いていた。

「赤城・・・・・・・・何故ここに・・・・・・・・？」

勝は目を疑った。誰もいなかったはずなのに何故赤城がいるのかわからなかった。

「勝・・・・・・・・お前があの人パイロットなのか？」

赤城は真剣な顔で話す。

ここで違つと言ってももう降りるところを見られたので言い訳ができないので、勝は頷いた。

「そうなのか……お前が……」

赤城はディバイガンを目を潤わせて見つめる。

赤城の顔を見て勝は何も言えることが無くただ黙ることしかできない。

勝は赤城がロボットが好きなことは知っていた。が、勝はディバイガンのことについては全く赤城に話したことが無い。

「勝、これあの石像のときのロボットだよな？」

「そうだよ……」勝は赤木の質問に対して答えるのが辛い。

「なんで、教えてくれなかったんだ……」

赤城は真剣な顔で勝を見る。

「だって……」

勝は黙る。

「だってじゃねえよ！！友達だろ？そういう事を相談してくれないのか？俺がそこまで信用できないか？」

赤城は勝に対して真剣にキレている。

「そういう訳じゃないんだ……！君を危険の身にさらわせたくなかったただけなんだ！」

勝が言う。

「そんなの奇麗事にしか聞こえない……」

赤城は勝の方を向かずに紀香達の方へ向き歩き始めた。

勝は待つて！！と何故か言えなかった。

そういうつもりではなかったのに………なんで理解をしてくれなかったんだ………？勝の心の中には疑問と不満がいっぱいになっていた。

最近やはりデイバイガンたちの事が多くテレビで報道されている。宇宙からの侵略者？とか、宇宙からの救世主など、色々な事を言われている。

勝は、ご飯を食べながらボーっと見ていた。

朝食を済まし学校へ向かった。いつもどおり紀香と合流し学校へ向かう。

教室に着けばいつも赤城が「おはよう」という挨拶してくれるが、ここ最近あの出来事が起きてから、勝と赤城の間には亀裂が入っていた。

勝は話しかけたいのがいっぱいいっぱいなのだが、やはり話しかけるのは気まずく、何も話さない日々が続いていた。

「勝……赤城君との間に何かあったの？」

紀香が心配そうに勝へ聞く。

「いや……別に……」

勝はそう言いながら机の引き出しから算数の教科書を取り出した。

「何にも無い訳ないじゃない！いつも仲良い二人がこんなになるなんて、今まで無かったのよ？」

紀香が心配そうに言う。

「もういいじゃないか……、紀香には関係ない」と言い、勝は立ち上がってどこかへ言ってしまった。

赤城も同じく勝に話しかけようとしているがやはり気まずい。

自分からあんな事をやってしまって、こっちから言うのもあれだし……などと思っていた。

赤木はあれからずっと悩んでいた。何故勝が乗れ、自分が乗れないのか……、勝は自分ほどロボットが好きではないのを知っている。

こっちはあらゆるロボットのフィギュアにプラモデルなどアニメも全部DVDに収めているのに……何故なのか。

赤城は両手で自分の髪の毛をくしゃくしゃにして、教室を出て行った。

勝は屋上にいた。いつもなら入ってはいけなのだが、秘密でいつも勝は行つては考え事などをしているのである。

勝は自分の体に当たる優しい風が心地よかった。自分のなかのストレスが少し解消されたきがした。

勝が手すりに体をよりかかせていると、カイザーモバイルが電子音を立てたので、勝は電話に出た。

「勝です………」

「勝、私だ！」

もちろん声はディバンである。

「またバッダーズ？」

勝が聞くと、そうだと言う返事が返ってきた。勝は放課後なので素早く学校を抜けて裏山に向かった。

赤城が手持ちTVを見てみると、江ノ島で大きな鷹が暴れているのを報道されているのを見た。

（また・・・勝が戦うのかもしれない・・・）赤城は急いで家に帰り、超高速自動自転車に乗り、江ノ島に向かった。

続く。

第5話 赤城正義の価値とは？ - 01（後書き）

作者「祝20部！」

勝「あつという間に20部……すごいな」

赤城「しかも20部って俺たちにとっては……あんまり祝えないな……」

須田「そうですね………て思えば報道している場面であたしの報道かしら？」

作者「あん………そうだよ。」

須田「じゃあ、久々に登場かしら……」

作者「はあ、わかったよ、第20部突破記念として、次部出してあげるよ」

須田「やった」

次回&意見感想お願いします。

第5話 赤城正義の価値とは？ - 02

江ノ島上空では、地球では有り得ないものすごい大きい鷹が上空から町を攻撃していた。

「構わない！撃ちつくせ！！」

自衛隊の上官がのどが枯れそうなくらい叫ぶ。

機関銃などの渴いた音が、江ノ島の海岸で響く。いつもならサーフイン目的で来る若者達で盛り上がっているはずの江ノ島は今日はたかのせいで静かであった。

「グオオオオオン」

鷹はものすごい鳴き声を出し、湾岸上に並ぶ戦車を殲滅していく。

「く……税金の無駄使いなだけか？」

上官は、拳を強く握る。

すると、はるか後方部からジェット機のエンジンの音がした。

上官は空軍を呼んだ覚えは無かった。後ろを振り向くとそれは軍のものではなかった。どこの軍にも属さないジェット機。

そしてあつという間にそれは、機械超人……ロボットへと変わった。

「勝・・・・・・・・、あれだ！」

ディバンの緊張した声が聞こえる。

「うん・・・・・・・・空中戦だね今回は・・・・・・・・」

勝は、唾を飲む。のどによだれが垂れるのがわかる。

勝は左右のレバーを上方へ勢いよく上げた。

「・・・・・・・・戦闘録画モード」

鷹は眩き羽を広げた。その姿に勝は驚いた。

有り得ないほどの広い翼はまさしく大空の覇者に相応しいその姿。
勝は圧倒されていた。

「・・・・・・・・負けるもんか！」

勝は、肩の力を抜きリラックスした。

「Dガンー!!」

ディバイガンはガンを出し3発打ち込んだ。

「グオオオオオオオオ」

翼の羽ばたかせる音がコックピット内にも響く、翼のものすごい風力にビームは、跳ね返された。

「なに?!」

銃弾が鉄にめり込む乾いた音が耳に入ると同時にディバンの呻き声がする。

「・・・・・・・・跳ね返した・・・・・・・・?」

ディバンは驚いたような声で鷹を見る。鷹は相変わらず余裕の表情を見せる。

「勝・・・・・・・・長距離線は向いてない。格闘戦に持ち込むぞ!」

ディバンはそう言い、足からDナイフを二本取り出した。

「行くぞお!! バッダーズ!! Dナイフの切れ味を受けてみる!」

足の裏についているブースターをうまく利用し突入し始めた。

「・・・・・・・・グオオオオ!!」

鷹は再び空を覆いつくす様な大きな翼で風を巻き起こした。

「ヌウウウ!!」

ディバンの巨体でさえ、強風に手こずっていた。少しでもブースターの火力を抜くと後ろへ吹っ飛びそうである。

「うおおおおおおお!!!」

ディバンは何とか風を抜ける事ができた。

「喰らえ！Dナアイフ！！」

太陽に向け、Dナイフを持った両手を上空に上げると同時に勢い良く振り下ろした。

しかし、鷹の肉体が切れないのである。何度やっても鉄と鉄のこすれる音がする。

「今度は鋼鉄のボディかよ……………」

勝は額から汗が出てきていた。

「えゝこちら現場の須田です。今巷を騒がせる大巨人がいまここ江ノ島で、先程現れた大きな鷹と先頭を始めました！」

須田は上空を見ながらリポートをし、無事終えた。

「はいカット！…………はいありがとうね須田ツチャン」

ディレクターが笑顔で言う。

「はい…………、それよりそろそろ離れましょうよ、危険です」

須田の言葉に報道陣は、退散を開始し始めた。

すると、ゴムのすれる嫌な音が聞こえ、思わず須田は耳を押さえた。

「・・・・・・・・勝・・・・・・・・もう来ていたか・・・・・・・・」

少年はゴーグルをして自転車に乗っていた。

「・・・・・・・・君は？」

須田は思わず少年に聞く。

「・・・・・・・・いえ別に」

少年はクールに言うと、再び自転車に乗り消えて行った。

「ここならよく見える！」

赤城は自転車を止め、ゴーグルを取り、頭の上に掛けた。

激しいディバイガンの攻撃が続いている。赤木はただそれをじっと見つめることしかできない。そんな自分がいやであった。

「・・・・・・・・俺も戦いたい！・・・・・・・・友達が目の前で、戦っているのに立っている事しか俺にはできないのか・・・・・・・・？赤城は、下唇をかみつつジーンと見ていた。

そのときであった。赤城の頭に激痛が走る。

「・・・・・・・・うつ・・・・・・・・」

赤城は思わずその場で座り込んでしまっていた。

何なんだ・・・・・・・・この痛み・・・・頭に手を押さえながら赤城は唸っていた。

「・・・・・・・・のよ・・・・・・・・」

頭にじかに声が聞こえてきた。

「・・・・・・・・？何なんだ？」

赤城は辺りを見回す、しかし何も無い。赤城は不思議に思うものの再び声はした。

「勇気あるものよ・・・・・・・・。搜した・・・・・・・・」

声はどこか嬉しそうであった。

「今すぐ来てくれ・・・・・・・・我が場所に・・・・・・・・」

そうすると、声は消えた。

「・・・・・・・・我が場所・・・・・・・・？何処なんだ？」

赤城は辺りを見回すと、灯台が目に入った。赤城はなぜか灯台に声の主はいる感じがした。

「行くのか・・・・・・・・？俺・・・・・・・・、行くしかないか」

赤城は再びゴーグルを着け、自転車に乗り灯台へ向かった。

続く

第5話 赤城正義の価値とは？ - 02（後書き）

須田「久々に出番あった」（泣）

勝「良かったですね。」

赤城「やりましたね！」

紀香「おめでとう！」

作者「もう出番無いよ！」

須田「ありが………エッ?！」

次回＆意見感想お願いします。

第5話 赤城正義の価値とは？ - 03

「・・・・・・・・・・」

赤城はひたすら、灯台に向かって自転車を向かわせていた。全自動の自転車（赤城コーポレーション製）なので、足は特に動かす必要は無いのに妙に汗をかいていた。

自分に何が待っているのか・・・・・・・・、その正体は何なんだろうか・・・・・・・・？赤城には全くわからなかった。

「・・・・・・・・待ってるよ・・・・、声の主！」

赤城は一気にスピードを上げた。

「ゴオオオオアアアアア！！！」

ものすごい突風がデイベンを襲った。

「ウウウウオオオ！！」

必死に両手で守ろうとするものの、風圧に勝てず、後ろへ勢いよくぶっ飛ばされてしまった。

「グアアアア・・・・・・・・あはあ、クソオ！」

勝は、拳で機械を叩いた。

全く歯の立たない相手、確かに今までの敵、石像、アオリイカもどき、巨大パンダどれも強敵であったが、今回の敵はそんな度合いではない、全く攻撃を与えられないのだ。

（俺はこのまま死ぬのではないのか………？）

勝は今までに無い不安に襲われていた。鷹はまるで狩人のような目つきでこちらを見つめている。

その目は感情の無い赤く火のように美しいが、どこか恐怖感を持たせるような雰囲気を持っている。

「く……勝……今回は不味いぞ………」

デイバンが珍しく弱気な発言をした。今までこんな事を行った事は無く勝は驚いた。

「どうしたんだよ？デイバン……」

勝は、更に不安になる。

デイバンの色は薄くなる。勝は再び勇気が失われかけていた。

鷹はそれを見計らったかのように、足の爪を輝かせこちらへ襲い掛かってくる。

「………駄目だ！避けられない！！」

勝はレバーを必死に動かそうとするが、間に合わない。勝は目を瞑った。

金属と金属の接触する音が勝に聞こえた。勝は恐る恐る目を開けた。

「大丈夫か？隊長ヒヤッハアアア！！」

イガールがギガクラッシャーで何とか耐えていた。

鷹の後ろからも爆音がする。

それは、ジャックマリンのミサイルランチャーである。

「こちら、ジャックトリオ！ただいま推参いたしました！」

ジャックトリオのマリンの爽やかな声が聞こえてくる。

「皆……！！」

勝は笑顔を取り戻した。

「勝！行くぞ！！」

デイバンの声が聞こえる。勝はそれに答えるように頷きカイザーモバイルを取り出した。

「コード！！」「735」！！海底合体！！」

勝はカイザーモバイルを挿入する。

「了解！！」「」

3人が叫ぶ、タンクとドリルが両腕へ変形し、変形したジャックマリンと合体する。

「右手に戦車、左手にドリル、海底の平和守ります！……深海合体スーパージャック！」

背中のジェットをうまく利用し上空へ浮かんでいる。

「続いていくよ！コード「821」……破滅合体！」

勝が叫び、カイザーモバイルにコードを入力して、挿入した。

デイベンとイガールはデイベイガン合体すると、静かにスーパージャックの隣に浮かんだ。

「一気に決める！！破滅剣！！」

デイベイガンは静かに両手を胸の称号エンブレムの前に出す。

黄色い光がデイベイガンの手に包まれ剣を形成する。

デイベイガンは剣をしっかりと握り、剣先を鷹に向ける。

「破滅剣！！疾風斬波！！」

デイベイガンは、破滅剣を大きく横に振った。その刀身からはかまいたちのような鋭い風が走った。

それを難なく鷹は避けた。そこにはスーパージャックの砲身が待っていた。

「喰らえ！キャノン！！」

ものすごい爆音を立てて、鷹の頭部は爆発した。

「これで何も無いわけは無いだろう」

スーパージャックは後ろを向きながら言う。

「いや・・・まだだ！」

デイバイガンはスーパージャックに言った。

ものすごい速さで鷹がスーパージャックの背後を襲った。

スーパージャックは何も発する事ができないまま海に放り出された。

デイバイガンは鷹の方を向いた。勝は、驚いた。

「・・・ヒューマノイドモード？」

鷹は完全に超機人へと姿を変えていた。

赤城は何とか灯台に着いた。自転車を近くに停めて灯台を見上げた。

「ここでもいいのか・・・？」

赤城はゆっくりと灯台の扉を開けた。

続
く

第5話 赤城正義の価値とは？ - 03 (後書き)

作者「今回はネタが浮かないのであとがきはお休みにさせていただきます」

第5話 赤城正義の価値とは？ - 04

赤城がゆっくり灯台に入った。灯台の中はほのかに明るく心地の良い空間であつた。

「・・・ここにいらっしゃる!!」

赤城は何かを呼ぶように叫んだが、全く反応が無い、赤城はそのままつかつかと中に入っていく。

なかは、何年かも使われて無いらしくうす汚くあちこちではくもの巣が張っていた。

赤木は自分の頭に当たりそうなくもの巣は、手で取りひたすら階段を上った。

1段上るごとに金属のきしむ音が灯台内に響く。赤木はそんなものは気にせず何かに取り付かれたようにひたすら歩いていった。この先何があるかもわからずに・・・。

「グオオオオオオオオ!!」

鷹超機人は大声で叫んだ。その音は衝撃波を作りデイバイガンを襲う。

「くそ・・・! スーパージャックがいれば・・・」

デイバイガンは両手を顔の前で交差して、防御するのが精一杯であつた。

「ウグリアアアッアア!!」

剣で、スーパージャックを十字に斬りつけた。

爆発音がする。スーパージャックは十字の傷を付けられ、目から光が消えた。

「スーパージャックウウウウウウウ!!」勝の叫びも
むなく、湘南の海へ失速しながら消えていくスーパージャック。

「この野郎……!許さない!!」

勝の叫びとともに再びデバイガンの4本の角は8つに分かれた。

「コード529!」

勝はカイザーモバイルにコードを入力し差し込んだ。

「必殺モード確認!!」

デバイガンは叫ぶ。

「破滅剣!エツボリユウション!!」

破滅剣は剛・破滅剣へと姿を変えた。

「うおおおおおおお!!」

勝はもう怒りしかなかった。大切な仲間を壊した鷹超機人への怒り

しかなかった。

「剛・破滅剣！！剛風真空波！！」

ディバイガンは剛・破滅剣を大きく振ると同時に真空波が発生した。

鷹超機人も対抗するように自らの剣を大きく大きく振った。

真空波と真空波がぶつかりものすごい衝撃波が発生する。ディバイガンはものともしない。

ディバイガンの真空波が勝った、勝は少し油断してしまった。

「勝！奴が来ているぞ！！！！」

勝が少し遅れて前を見ると、鷹超機人が目の前にいた。

駄目だ・・・・・・避けられない。鷹超機人の剣が、ディバイガンの腹部に刺さったのがわかった。

コックピット内で響く非常事態を知らせるサイレン。

勝は何もしやべられない。ディバイガンはただ落ちていく金属の塊になってしまった。

ディバイガンの海に落ちる音が悲しく響いた。

ディバイガンは負けてしまった。愛する人を守れずに・・・・・・

赤城は最上階に到達していた。最上階には紫色のクリスタルが赤城を待ち構えていた。

「良くぞ来た・・・選ばれし者赤城浩次・・・・・・・・」クリスタルから声がする。

「お前は誰なんだ・・・・・・・・！」赤城は叫ぶ。

「今言う必要は無い」とクリスタルが言うと、クリスタルは白く輝き始めた。

赤城はまぶしく目を瞑っていた。

続く

第5話 赤城正義の価値とは？ - 04（後書き）

勝の叫ぶ声。

赤城の決断・・・・・・・・そして

今ここに新たなる勇者光臨。

「我が名はデメルス・・・天空勇者デメルス！」

その目に焼き付ける大空の勇者デメルスの力を！

勝「とうとう次部には・・・・・・・・だね」

赤城「ああ・・・・・・・・だな」

須田「その・・・・・・・・って何なんですか！」

勝「おっしえな〜〜〜い」

次回と意見感想お願いします。

第5話 赤城正義の価値とは？ - 05

赤木の体は光に包まれていった。その光はどこか懐かしいようにも思えた。

目を開くと宇宙空間のような場所に赤城はいた。

「ここは………?」

赤城は左右に首を動かすが同じような風景しか写らない。

赤城がしばらくそうしていると、あの声が聞こえた。

「選ばれし者………赤城よ………」

「おい！ここは何処なんだ！！一体俺に何をすべきなんだ！」

赤城が叫ぶが、それを無視するようにクリスタルは話し続ける。

「今からお前を試す、もしお前が適格でなければ、ここで殺す」

その言葉に赤城は驚いた。

「何を言ってるんだよ！！」

「では、はじめよう」

その声と同時に宇宙が白くなった。

「これは宇宙が生まれる瞬間だ、どうだ綺麗ではないか？」

赤城は光景を良く見た。中心では大きな爆発が起きて、それと同時に黒い宇宙が流れ込んできている。

「宇宙は、こうして始まったんだ……」

すると、急に場面が変わる。

場面は見た事も無い機械が、たぶん地球と見られるものを襲っていた。逃げ惑う人々、泣き叫ぶ少女、もう何も希望を持っておらず立ち尽くす男性、抱き合うカップル。

「これは……」

赤城が聞く。

「これは……1年後の地球の光景だ」

「1年後……？これがなのか？」

赤木はよくその光景を見た。すると、勝の乗るロボットが現れた。

赤城は思わずあつと言う声を上げてしまった。

次々と、機械を破壊していく勝の駆るロボット。しかし次の瞬間であつた。

上空より現れた1体の機械超人が放った青い光が地球全体を包んだ。

滅んでいく地球……これが、地球の未来だと思つと、赤城は背筋が凍つた。

「なんなんだ……これ？」

赤城は苦笑いしながら言う。

「これは、１年後地球に降りかかってくる試練いや、破滅だ」

クリスタルの声は言う。

「何とかする事ができないのか?!」

赤城が叫ぶ。すると、クリスタルは話した。

「簡単なことだ、君も戦えばいい」

クリスタルの発した言葉に赤木は目を丸くした。

「何だつて………?俺も戦えと?!」

赤城は思わずものすごい大声を張り上げてしまった。

「ああ、そつだ。私と共にな………!!」

再び白い光が赤城を包んだ。

「起きろ・・・・・・・・、起きるんだ」

赤城を呼ぶ声がしたので赤城がゆっくり目を開けて起きた。

「うわぁ！」

起きると同時に叫んでしまった。なんと、目の前には長機人が存在していたのである。

「喜べ、君は適格者であつた。さあ、私と共に地球の未来を守るために戦おう！」

超機人の言葉に赤城は頷いた。

すると、超機人の胸から発射された緑の光に赤城は吸収された。

鷹超機人はデイバイガンが沈んだのを確認すると、次に灯台の方を向いた。

「勇者の・・・・・・・・目覚め」

羽のなびく音がした。

赤城は静かにその音を聞きながら深呼吸をした。

羽に包まれたものはゆっくり羽を開いた。

「我が名はデメルス……天空勇者デメルス!!」

デメルスは一言で言うと、白い翼を持つ白き騎士であった。

「これが、デメルス……」

コックピット内で赤城は胸の高鳴りを感じていた。

続く

第5話 赤城正義の価値とは？ - 05（後書き）

勝「なんか、白き勇者ってクールで良いね。」

須田「そうですね……………」

赤城「だろっかつこいいべ！なあ、デメルス！」

デメルス「あの……………私の事よりあちらの方が……………」

ディバン「どうせ……………」

作者「えつと……………次回もお願いします！」

ディバン「どうせ……………」

第5話 赤城正義の価値とは？ - 06（終）

「・・・・・・・・新たなる勇者・・・・・・・・」

鷹超機人はそれを見つめながら呟いた。

白い翼を羽ばたかせながら上空に浮いている超機人天空勇者デメルスは、静かに鷹超機人を見つめていた。

「赤城・・・・・・・・どうやら彼らは仕留め損ねたらしいな」

デメルスが言う。

「あれか・・・・・・・・」

赤城は緊張しながらもすっかりモニターから敵を見つめる。

「今回は初めてだから、失敗しても大丈夫だ」

デメルスが優しく言った。すると、なぜか赤木の胸の高鳴りは静かになった。

やってみるしかない！赤城は、両手で、コックピット内の2本のレバーを握った。

「新たなる勇者・・・・・・・・我らの障害・・・・・・・・」

鷹超機人は、羽を広げた。それと同時にものすごい風圧の風がデメルスを襲った。

「ふ・・・・・・・・そんなもの」

すると、デメルスの背中についている羽が大きな音を立てて風を生させた。

風と風は相殺した。

「そんな程度なのか貴様は？」

デメルスはつまらなそうに言う。

それとは逆になれない操作に赤城は必死であった。

「えっと・・・・・・・・右が上半身で・・・・・・・・左が下半身か・・・・・・・・」

「

鷹超機人は再び両手を前に出し、剣を出した。

「・・・・・・・・接近戦で来るか・・・・・・・・なら！」

デメルスは、自分の肩についている剣の刃が無いものを出した。

「The beautiful world (美しき世界) ・・・
・・・A sword of silver (白銀の剣) ・・・
Silver シルバーブレイド bride!!」

デメルスが呪文のような事を発すると、刃が白く発光しながら現れた。

「コイツで終わりにしてやろう……!!」

デメルスは、剣を鷹超機人へと向けた。

「ウグオオオオオオ!!!!」

ものすごい速さで突っ込んでくる鷹超機人。それを見て赤城は驚いた。

「心配するな！お前ならやれる、私が選んだものなのだから！」

デメルスが赤城に対して言う。

赤城は、強く決心し、レバーを再度握る。

（相手の行動を予測するんだ……勝もやっているんだ！俺にもできる!!）赤城は静かにモニターを見つめた。

（今だ!!）赤城は勢い良くレバー下に向けた。鷹超機人の剣をすれ避けた。

上には、鷹超機人の腹部が見える。赤城は上にレバーを上げた。

「喰らえ!!!!」

シルバールブレイドが、腹部に刺さる。

「グオオオオオオオオ!!!!」

呻く鷹超機人それを無視し、デメルスは剣を抜く。

すると、コックピット内の一部が白く光った。

「何だ・・・・・・・・・・？」

赤城はそつと手を差し出してみた。

手にしたのは携帯であったが、普通の携帯とは違う赤く輝くボディに、黄色の3本のラインが輝いている。

「これは・・・・・・・・？」

赤城は携帯を見つめながら呟いた。

「それは、エンペラーモバイルだ！それは私と君を繋げる大切な鎖だ。」

すると、エンペラーモバイルからアラームがなり始めたので、赤城は驚いた。

静かに赤城はエンペラーモバイルを開く、そこには『DEMRSE
A b r i n g i n g s u r e d e a t h m o d e c o
r d「103」』と書かれていた。

「それを入力し、この光っているところへ！」

デメルスが叫ぶ。

「わかった！コード「103」！」

赤城はエンペラーモバイルを差し込んだ。

「必殺モード確認!!」

すると、ものすごい音を立てて羽がデメルスの体を包んだ、そして、ゆっくり開くと白銀に輝いたデメルスが姿を現した。

するとシルバーブレイドも白く輝き始めた。

「シルバーブレイドエボリューション!! プラチナブレイド!!」

シルバーブレイドの色が透明になりいつそう輝きを増していた。

先程の攻撃でかなりダメージを食らった鷹超機人は再び、剣を構えデメルスに突っ込んできた。

「悪いが・・・そうはいかない!!」

デメルスは剣を上空へ掲げた。

「ウグオオオオオオ!!」

鷹超機人はスピードを上げた。

「アデュース・パリッテナ・ゴルーダム!!」

プラチナブレイドが光り輝き始める。

「グランドクロス!!」

プラチナブレイドから光輝く十字の光が放たれた。

次の瞬間鷹超機人はあっという間に跡形も無く消滅してしまった。

「うわ．．．．．すつごいな．．．．．」

赤城はただ驚くことしかできなかった。今まで嫌と言うほどロボットアニメを見てきたが、実際に見るものとは違った。

すると下方で水が割れる音がした。そこにはスーパージャックを抱えたデイバイガンがいた。

「お前．．．．．デメルス！何故お前が．．．．．？」

デイバイガンは驚いたようにデメルスを見つめていた。

「今は言えない．．．．．、だがいずれ．．．いずれお前に伝えよう。我が親友よ」

デメルスは羽から一本取り、それを上空に投げると光に包まれて消えた。

「今のは．．．．．？」

「．．．．．宇宙連合の同僚さ．．．．．アイツは．．．死んだはずなのに．．．．．」

デイバイガンは静かに言い、その場を去った。

そこで映像は終わっていた。

「ふう〜んこれが宇宙連合か……………たいした事が無いな」
黒い部屋にいる少年が笑いながら言うと、隣の女性が首を突っ込む
「サイレル！あんなね…………油断は巾着って言葉があるでしょ！全く…………」

と言うと、それに突っ込むように背の高い男が更に突っ込む。

「それを言うなら油断は禁物だ…………」

男は静かに言った。

「あはは…………そうとも言っ」

女性は笑ってその場をこまかした。

すると、一人の男が3人の真ん中を歩いてきた。

「おい！お前らしい加減にしるよもう時期あの方が帰って来るんだぞ！」

といった瞬間4人の後方のドアが開いた。

「……………バッテリー様、お帰りなさいませ」「…………」

4人は同時に頭を下げた。

「どうだい．．．．？宇宙連合は？」

笑みを浮かべながらラクラス・バッターは4人に聞いた。

「．．．．．はつきり言って雑魚ですね．．．．、鷹のビーフユルを倒せなかったんですから．．．．、我らバッターズ四天王の敵ではありませんよ」

リーダー格のボルフェンが笑いながら話した。

「フフフ．．．．そうかならば、次の襲撃のときにそれを証明してくれないか？」

バッターが話すと、先程の少年が手を上げた。

「サイレル・ブラッフォンが行きまゝす」

「．．．．．よろしい、地球人に我らの恐ろしさを味あわせるんだ！」
と言うと、少年は頷きその場を去った。

（ふふふ．．．．宇宙連合よ我が野望は、打ち砕かせないぞ．．．．
・ふふふふふ）

続く

第5話 赤城正義の価値とは？ - 06 (終) (後書き)

次のお話

ついにバッダーズ四天王が動き出す。

見た事も無い強大な力に勝とディバイガンは勇気の真の力シャイニングモード等の全力で挑むが何も手が出せない。

「なぐんだ、もうこれでお終い？つまんないな」

果たして四天王の力とは・・・・・・？

次回第6話 勇者の敗北

お楽しみに。

第6話 勇者の敗北 - 01

興奮していて赤城は全く眠れなかった。寝巻きの右ポケットに入っているエンペラーモバイルを取り出しては笑っていた。

「はあゝ本当に俺にロボットのパートナーができるなんて・・・最高だな~~~~」

赤城はもう一度ベッドに横になった。

赤城は鏡で自分の姿を見た。本当に夢がかなった喜びも大きいが、自分は本当に最後まで戦い抜ける事ができるのか不安であった。

赤城は右ポケットにもう一度エンペラーモバイルをしまい、学校への準備を始めた。

勝は今までに体験した事が無い闘いに恐怖を覚えていた。攻撃が効かない敵、そして、敵か味方かわからないなぞの勇者超機人。もう戦うことが嫌になってきていた。

学校に着くなり、机に乱暴に荷物を置き椅子に座った。

ひとつ溜息をつき、バックから本を一冊取り出して読み始めた。

「どうしたのよ、あんたここ最近元気ないじゃない」

紀香が、勝の頬突付きながら話しかけてきた。

「うん・・・・・・・・・・・・・・・・」

勝は何気なく返事をした。

幼馴染である紀香であるからこの異常事態が分かる。

「ねえ、もう小さい頃からの中じゃない？話してくれてもいいんじゃないの？」

紀香の言葉を勝は聞きもせず、そのまま本を読み出した。紀香は鼻でため息をしてその場から去った。

勝は紀香が去るのを確認すると本を閉じた。

「僕が何故戦わなければならないのだろう・・・・？」

勝には最近そういう疑問が生まれてきていた。

地球圏外に浮かぶ紫色のダイヤやモンドの形をした物体。そこそがバツダーズの本拠地『ブレイラ・リー』

サイレルは、自分の超機人の手入れをしていた。

青く光るボディ、手には3本の突起物があり、背中には大型のブースター。

アディルバ、これが、バツダーズ四天王サイレルの愛機である。

「どうだい？緊張しているのか？」

女性のエルーマが笑いながら聞く。

「うん、この調子なら余裕で倒せるよあんな奴らなんて……」

サイレルは笑みを浮かべた。

それを見てエルーマはその場を去った。

サイレルは窓から地球を見つめた。

「必ず……第2の宇宙を作ってみせる！」

サイレルはそういって、アディルバーのハッチを開き搭乗した。

勝は学校が終わると、すぐ帰宅して自室のテレビをつけて、ゲームを始めた。

（もう二度と戦いたくない……）

（もう二度と戦いたくない……）

（もう二度と戦いたくない……）

（もう二度と戦いたくない……）（もう二度と戦いたくない……）（もう二度と戦いたくない……）（もう二度と戦いたくない……）

勝はただひたすらそれを思うようになってきた。戦闘への恐怖、不

安、苦しみ。それらが勝を縛り付けていた。

しかし、バツダーズは待つてくれるものではない、再びカイザーモバイルが鳴り響いた。

「はい……」

勝は不機嫌そうにそれをとった。

「勝！バツダーズが現れたぞ！今すぐに来てくれ！！」と言うとデイバンは通信を切った。

勝は渋々裏山に向かった。そこではデイバンとイガールが勝を待っていた。勝はデイバンに乗り込み、目的地へ向かった。

「ふっん、ここがチキユウか……」

はじめてみる地球の光景にサイレルは面白そうに見ていた。

「さて……始めるか」

サイレルは、行動を開始した。

次の瞬間であった、腹部から高エネルギー波が発射された。瞬く間に街を飲み込んだ。

光がやむとそこは、地獄と化していた。

ビルはすべて倒壊し、あちこちでは攻撃に巻き込まれた人々の死体が散乱している。

「フフフ……こんなもんならすぐに地球を壊せそうだな……」

サイレルが笑っていると、ディバンたちが到着した。

「な……これは?!」

勝はあり得ない光景に驚いた。そして、モニターに映る敵を見た。

「コイツが一人でやったのか?」

勝は目を丸くした。

「来たな……宇宙連合!」

サイレルは瞳孔を開いてモニターから睨み付けた

続く

第6話 勇者の敗北 - 01 (後書き)

サイレル「ふゝんここがあとがき部屋か」

ボルフエン「居心地は悪くないな……………」

背の高い男(名前アメデウス)「同意」

エルーマ「何よみんなあゝそんなに硬くなっちゃってゝパァゝつとしようよ」

作者「あんま荒らさないでね……………」

第6話 勇者の敗北 - 02

勝はいつもより汗を掻く量が多い事に気づいた。勝はそれを拭った。

「ディバン・・・また君みたいなロボットだね」

勝はディバンに語りかけた。

「・・・・・・・・どうやら彼らもそろそろ本気らしいな・・・・・・・・」

ディバンはしっかりと構えながら呟いた。

「ふふふ・・・・・・・・僕と戦うつもりなのか・・・・・・・・面白い」

アディルバーの背中中のブースターが点火する。

アディルバーは空を飛びはじめた。そこから両手を出しバルカン砲を出した。

「勝、上からだ!!!」

勝はその言葉を聞き、右ヘレバーを動かした。

アディルバーは垂直落下をしてきて、ディバイガンの目の前にいた。

「ふふふ・・・・・・・・遅いなあ！」

サイレルは笑いながらアディルバーの両手のバルカンを発砲させる。

「ぐあああああ!!」

何もできぬままディバンは棒立ちでバルカンを喰らう。

「こいつ……強い」

勝は顔をゆがめながらレバーを引き一旦体制を整えた。

アディルバはそれを見ると、右手の中指を立てて挑発した。

勝はそんな挑発に乗ってられる余裕は無かった。もう既に中では色々な異常事態を知らせる警報が鳴り響いている。その音は勝の耳を破りそうであつた。

「くそあ……どうすりゃあいいんだ？」

勝は頭を抱えた。すると後方から車のエンジン音が聞こえた、

「ひやははは!勝!大丈夫かひゃあは!」イガールがディバンの横に立った。

「イガール……よし、コード!」「821」!!破滅合体!
「!!」

勝はカイザーモバイルにコード入力をし、挿入した。ディバンとイガールは合体し、ディバイガンになった。

「へえ、合体するのか」

サイレルはディバンとイガールの合体を見て感動していた。

「そんな余裕を持っていられるのは今のうちだ！」

ディバイガンは、ディバイショットをアディルバーの脚部付近に向けて砲弾した。

「あまゝゝい!!」

サイレルは、余裕にかわせた。

「誰が……あれが本命といった!!」

アディルバーの下部にはディバイガンがギガクラッシュパンチを構えていた。

そして、ブースターを使い上方へギガクラッシュパンチをアディルバーに直撃させた。

「ちょ……直撃?!」

爆発と共にアディルバーは、地面に叩きつけられた。

「………やったか？」

勝は目を細めながらアディルバーを見た。

「………ちえ………遊びすぎたか………」

アディルバーはゆっくり立ち上がった。

すると、アディルバーの背中から青い光が放たれた。

「7割の力で行くよ！レルーバ・エボリューション！！」

青い光がアディルバーを包んだ。

光がやんだ。勝はアディルバーを見たが、全く変わった様子は無かった様子は無いのに、勝は不思議に感じた。

「行くぞ！！」

アディルバーが動き出すと姿が消えた。

「！！」

勝が相手を探していると、アディルバーに背後を取られていた。

アディルバーは両手の手の平を、ディバイガンの背中につけた、すると見る見るうちに手が緑に輝きだす。

「…………喰らえ、ジエンドオブクラッシュ」

手からものすごいエネルギーが放出された。

爆発音と共にディバイガンの背中部分の部品が砕け散った。

「ぐあああああああ！！！！！！」

ディバイガンの悲痛の叫びが地獄と化した街中に響き渡る。

ディバイガンはそのまま仰向けに倒れこんだ。

「なぐんだ、もうこれでお終い？つまらないな」

アディルバーは右手のバルカンをディバイガンに向けた。

続く

第6話 勇者の敗北 - 02 (後書き)

ボルフエン「サイレル、なに7割の力をあんな奴に出す？6割で十分だろう」

サイレル「つい……あはは」

エルーマ「というか、ボルフエンあんた6割も出さないとあんなの倒せないの？私は5割で倒せるは！」

ボルフエン「ふ……何を言う、あんなの4割で倒せる！」

エルーマ「前言撤回！やつぱ3割！」

ボルフエン「いや、俺は2割だ」

エルーマ「じゃああたしは……」

サイレル「馬鹿だね。あの二人」

ベルガス「御意」

次回もよろしくお願いします。

感想と意見も是非是非！お願いします！！！！

第6話 勇者の敗北 - 03

アディルバのバルカン砲の中から今にも弾が出てきそうである。

勝は全てが終わった気がした。そして、力の差も感じた、この広大な宇宙にはこんなにも強大な力を持つものがある事を知った。

「何か言い残すことはあるかい？」

見下すような言い方でサイレルが言い放った。

言い残すこと……あるわけ無いじゃないか……
勝は鼻で笑った。

撃とうとした瞬間、右側からミサイルが飛んできていた。

「勝！大丈夫か！」

スーパージャックが前回の傷を負いながらも必死に助けに来てくれていた。

「……スーパージャック！！駄目だ！！」

ディバイガンは朦朧とした意識で叫んだ。

「大丈夫だ！時間稼ぎくらい私にもできる！」

ディバイガンにそう言い放ち肩からミサイルを10〜15発近く打ち込んだ。

「・・・・・・・・無駄だね」

アディルバーは右手を出した、すると3本の突起物から高周波が出されミサイルは全て爆発した。

「なに・・・・・・・・！」

スーパージャックは驚いたようにその光景を見た。

しかし、ここで止まるわけには行かのでディバイガンの負担を少しでも減らせようと、スーパージャックはマリーントービンを使い竜巻を起こした。

「竜巻旋風波!!」すると、高速で回る竜巻が発生した。

竜巻は見る見るうちに大きさを拡大させ、アディルバーを飲み込んだ。
だ。

アディルバーを飲み込んだ竜巻の中は土ぼこりがものすごく視界はとても悪い。

「ふ・・・・・・・・小癪な真似をしてくれるな・・・・・・・・！」

サイレルは、左右のモニターを眼球を動かしながら見た。

すると、後ろからスーパーギガドリルの激しい刺しがアディルバーを襲った。

「なに?!後ろだと?!」

サイレルは驚いたようにスーパージャックを見る。

「喰らえ！！ギガドリル！！」

背中にスーパーギガドリルがめり込んでいた。

「ぐふぁ……………」

サイレルは、思わず声が漏れた。

すると、スーパージャックは竜巻の回転に乗り高速でアディルバの体の各部を襲う。

アディルバは思わず手を交差してガードの体制に入った。

「これで最後だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

スーパージャックはスーパーギガドリルに精一杯力を込める。

「……………ふ……………」

アディルバはなんと指でスーパーギガドリルを止めた。

「なに……………私のタイフーンショットガン竜巻散弾銃が……………」

スーパージャックは必死にアディルバの指から抜こうとするが、全く微動だにしない。

「君には7割では可哀想過ぎるよ……………弱すぎて！！」ア

ディルバーは指二本でスーパージャックの巨体を投げた。

それを見ていたディバイガンと勝は驚きを隠せなかった。

「間違いない……勝、今の俺たちではあいつを倒せない……」

ディバイガンの言葉に勝は思わずえっと言う言葉を上げてしまった。

「このままでは……スーパージャック、そして私たちも完璧に殺^やられるぞ……」

「なに言ってるの……？ディバイガン……らしくないじゃないか？」

勝が苦笑いしながらディバイガンに話す。

「わからないか……勝……？」

「なにが……？」

勝は聞いた。

「先程から7割の力とか言ってるが、あれは、違う。20分の7の力しか出してない」

「……え？」

勝は言葉を失った。

「じゃあ・・・・・・・・あれでもまだまだ力出せるのあの超機人は？」

勝は驚いたようにアディルバを見ながら言う。

「・・・・・・・・勝、これが力の差・・・・・・・・現実だよ」

ディバイガンは暗い声で話す。

「・・・・・・・・なに言ってるんだよ!!」

勝は突然大声を張り上げた。

「頑張ろうよ・・・・まだシャイニングモードも出してないじゃないか！」

勝は必死に言った。

「・・・・・・・・そうだな・・・・やれる事はやらなければない」

ディバイガンはゆっくり丁寧に立ち上がり始めた。

続く

第6話 勇者の敗北 - 03 (後書き)

サイレル「なんか・・・最近作者スーパーロボット。戦Wにはま
っているらしいよ」

エルマ「あれそうなの、連載は大丈夫なのかしら？」

ボルフエン「さあ？何とかなるであろう」

ベルガス「御意、ここで連載やめられても困る」

作者「いや、やめる気ゼロだから・・・変な事を言っつなよ!!」

次回&意見感想を是非是非!!お願いします!!!!!!!!

第6話 勇者の敗北 - 04

デイバイガンはゆっくり立ち上がったものの、やはりまだ先程の攻撃のダメージが残ってるらしく膝を着いてしまった。

「く……スーパージャック……」

デイバイガンはスーパージャックを見た。

必殺技の^{ハリケーショットガン}竜巻散弾銃が効かない事に対しスーパージャックはあせりを感じていた。

間違いなくこのままではやられてしまう。

「どうしたんだい？もうお終いになっちゃった？」

サイレルは未だに余裕である。

スーパージャックは再びミサイルランチャーを放った。

それを先程のように壊すアディルバの姿はまさしく無敵そのものであった。

「なら……！スーパージャックキャノンセット……」

右手のキャノン砲をスーパージャックは構える。

「標準………セットォ……」

砲口にだんだんとエネルギーが集まってくる。

「喰らええええええ！！！！！」

ものすごい爆音と共にエネルギー波が発射された。そしてそのエネルギー波はアディルバを飲み込んだ。

「これなら・・・」

スーパージャックは勝利を確信した、いくらあんな敵でもあの攻撃はキツイであろう。

しかし、その勝利への確信はかき消された。爆煙の中につつすらと人影が見えた。

アディルバーはゆっくりとスーパージャックに向かって歩いていった。

「アデス・・・・・・トウル・・・・・・」

サイレルは静かに呪文を唱え始めた。

「スーパージャック!!!もういい!!!無茶をするな!!!」

ディバイガンは必死に叫ぶ。

「嫌です。無理をしてもあなたを守ります!!」

スーパージャックはミサイルランチャーを再び放つ、無駄と言う事はわかっていても、悪あがきだけでも、それがスーパージャック

の今できる最高の抵抗である。

しかし、無常にもミサイルはアディルバに当たる前で全て爆発してしまった。

スーパージャックは思わず手を着いてしまった。スーパージャックにはもうエネルギーが0に近い状態であった。

「スーパージャック!!!!」

デイバイガンはふらふらしながらもしつかりスーパージャックに向かって歩き始めた。

大切な仲間を守るため……かけがえの無い者を守るため……デイバイガンは再び歩き始めた。

しかしであった。

蒼い光がアディルバの両手の手の平から発射された。

蒼い光は一直線にスーパージャックへ向かって行った。

「スーパージャック!!!!!!」

デイバイガンが右手を出す……しかし間に合わなかった。

光に飲み込まれていくスーパージャック

「地球の事は頼みましたよ……デイバイガン……!!」

爆発音が街中に響く。そこには無残な姿になったスーパージャックがいた。

「ふふふ……弱い事……」

サイレルはその姿を見て、笑った。

「……………許さない!!」

勝は叫んだ。

「シャイニングモード!!!!!!」

デイバイガンも同じく叫ぶ。

勇者は仲間の死に完全にキレたのであった。

続く

第6話 勇者の敗北 - 04 (後書き)

完全にキレた勝と、ディバイガン。

そして発動するシャイニングモード。

アディルバーへ怒りの攻撃を始める！

第6話 勇者の敗北 - 05

「DLIB AIGANE A bringing sure de
ath mode cord 569」再びカイザーモバイルの画
面に文字が現れる。

勝は何のためらいもなくコードを入力し、カイザーモバイルを挿入
する。

「必殺モード確認!!」

ディバイガンの叫びと共にディバイガンの4本の角は8本に分かれ
る。

コックピット内では全てのメーターが限界地を超え、ディバイガン
は黄金に輝いた。

ディバイガンの姿を見て、サイレルは驚きと共に喜びがこみ上げて
きた。

やっと面白くなってきた!!サイレルは拳の骨の音を鳴らし笑った。
最初に仕掛けたのはディバイガンであった。足のブースターを巧み
に使いアディルバーバの懐へ潜り込んだ。

「うおおおおお!!」

勝の叫びと共に、スーパーギガクラッシュがアディルバーバの腹部に

直撃する。

アディルバは衝撃で後ろにふらつく。

「デИБァイショットオオオオオオオ！！！！！」

ディバイガンの頭部から無数の砲弾がアディルバに放たれ、直撃し爆煙が上がる。

そして、**ディバイガン**は胸の前に**両手**を出す。

「破滅剣！！！！エエボリユウウシヨオオン！！！！！！！！！！」

エンブレム
破滅剣が胸の称号が出され、輝き始める。

「**剛・破滅劍！！**」

デイバイガンはしっかりと握った。

「そう君だけにはやらせない！！ムラフィス・レルーバ！！」

アディルバの胸部からレーザーが放たれた。

しかし、ディバイガンに当たる直前にレーザーは、蒸発した。

「無駄だ！ 勇気の力の前に貴様の攻撃は無力に等しい！！」

ディバイガンはそう言い、剛・破滅剣を空へ向けた。

「剛・破滅劍！！雷空裂空波！！！」

雷が剛・破滅剣に集まる。

「・・・・・・・・奴の必殺技か・・・・・・・・!!!!」

すると、アディルバーは静かに両手を広げた。

デイバイガンはアディルバーに向かって突進を始めた。

「十文字ぎ・・・・・・・・なにい???!!!!」

デイバイガンの叫びと共に、剛・破滅剣が止められた。

「・・・・・・・・ふふふ・・・・・・・・やはり君達では僕に勝てないんだね!!」

アディルバーはじわじわと拳に力を入れる。

剛・破滅剣からミシと言うひびの入る音がする。

「このおおおおおおお!!!!」

勝はひたすらレバーを動かすものの微動だにしない。

アディルバーの力はいまだに上がる、それと同時に剛・破滅剣にひびがドンドン入っていく。

「うおおおおお!!!!」

デイバイショットをアディルバーに直撃させるが全く効果が無い。

「終わりだね．．．！」

ベキ！と言つむごい音と共に剛・破滅剣は折れた。

勝は顔が青くなった．．．、唯一の必殺武器剛・破滅剣が折れてしまったのである。

「破！！」

サイレルの叫びと共にディバイガンの腹部にアディルーバの拳がめり込んでディバイガンの体は吹っ飛ばされた。

「ディバイガン！！！！」

何者かが、ディバイガンを呼んだ。

「．．．．デメルス？」

それは、天空勇者デメルスであつた。

デメルスは、ディバイガンを受け止めた。

「悪いな．．．デメルス．．．」

ディバイガンは、そう言い立ち上がった。

「あれは．．．．．白き天空を駆る勇者．．．．．あれの事が．．．」

第6話 勇者の敗北 - 05 (後書き)

作者「祝！！30部突破！！」

須田「これ以前にもやりましたね」

ボルフェン「そうなのか……作者も懲りない奴なんだな……」

作者「うおーい、その二人うるせえぞ！」

勝「なんか……今日怖い……」

紀香・エルーマ「なにがあつたの？」

作者「……ぐすん……スーパーロボット大戦Wの第54話が難しいんだよ」

ベルガス「それだけかよ！！」

サイレル「今……ベルガスの叫ぶ瞬間はじめてみた」

ベルガス「……ギク……何の事だ？」

作者「役作りもすごいもんだな……」

次回&意見感想是非是非！！お願いします！！< (() >

第6話 勇者の敗北 - 06 (終)

「避けきれない!!」

迫り来るエネルギーの球体を見て、ディバイガンは思わず両手を顔の前で交差した。

すると、ディバイガンの前にデメルスが両手を広げエネルギーを全身で受け止めた。

「ぐおおおおおお!!」

デメルスの叫びが聞こえる。足はものすごい重圧でゆっくりゆっくり後ろに下がっている。

「やめろ!! デメルス!! 俺の事などどうでもいい!!」

ディバイガンはデメルスに向かって右手を伸ばすが、届かない。

「駄目に決まっているだろう!! 地球を守るための部隊の副隊長がこんな所で死んでは意味が無いだろう!!」

ものすごいエネルギーを受け止めながら必死に叫ぶデメルスの姿を見て勝は、真の勇者の姿を見た気がした。これが……宇宙を守る勇者。

「アディルバーの攻撃を耐える事ができるのかな?」

サイレルは笑っていた。

「耐えられるさ！！勇気が残っている限り、私は負けない！！そして、死ぬわけには行かない！！！」

デメルスの叫びと共に爆発を起こした。

デメルスはゆっくりその場で倒れた。

「頼んだぞ……デイバイガン！！！」

そう言い、デメルスの意識は途絶えた。

何故自分のために……？何故こんな者のために……？
？何故自分の命を削るんだ……？

勝は、泣いていた。自分の無力さに泣いていた。もし自分にちゃんとした力があれば……、もしちゃんとした戦いができていたら……。

「くそおお！！！！くそおおおおおお！！！！！！」

勝は叫んだ。

「俺は戦う！皆の為に！！愛する人の為に！！！！」

勝は、強くレバーを握り締めた。

「剛・破滅剣！！」

勝は叫んだ。すると、折れたはずの剛・破滅剣は、光り輝きながら形を戻し、デイバイガンの元に戻った。

「なに・・・・・・・・？！」

アデイルーバに乗るサイレルは驚いた。

こんな事が存在するのか・・・・？サイレルは静かに見た。

「貴様だけは！！貴様だけは！！」

剛・破滅剣を称号エンブレムの前にかざした。

「魂よ・・・・悲しき魂たちよ！！我に力を与えたまえ！！！！！！」

すると、胸の称号から青い光が剛・破滅剣に集まり始めた。

「来るのか？なら・・・・・・・・！！」

サイレルは再びアデイルーバのパワーをあげた。

「貴様にわかるか？！愛するものを失った事、そして、信じていたものを失う事を！！」

剛・破滅剣は天に向かって青く伸びた。

「超神斬・剛王・破滅剣！！！！」

勝は、レバーを前に倒した。

「りゅうがしんすいたていちもんじ龍牙神髓縦一文字斬り！！！！！！」

ものすごい勢いで超神斬・剛王・破滅剣をアディルバーに向かって振るった。

「ぐうおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

アディルバーは2本の手でしっかりと止めようとした。

「うおおおお！！！！！！」

勝は力いっぱいレバーを握った。

しかし、爆音と共に超神斬・剛王・破滅剣は消滅した。そのままデイバイガンは立ち尽くしてしまった。

自分の最大の力を止められてしまった。もう立つ事が精一杯であった。

「終わりにしてやるよ！！」

アディルバーの両手にエネルギーが集まる。

「ジエンドクラッシュウウアアアアアアア！！！！！！」

サイレルの叫びと共に両手からエネルギーが放たれた。

デイバイガンとぶつかりと同時に大爆発を起こした。

勝は薄れ行く意識のなかで、地球から去るアディルバーを見た。
わが身を削りながらも地球を守る事ができたのである。

嬉しかった。初めて戦闘の後嬉しいと言う感情が芽生えた。

そして、ディバイガンはゆっくりと地面に倒れこんでしまった。

「おかえり〜サイレル」

エルーマがアディルバーが変えると同時に迎えてくれた。

「ただいま、エル姉……………」

サイレルは疲れきったような姿をしているのを見て、エルーマは驚いた。

「どうしたの……………」

エルーマはすぐサイレルの近くによりおんぶしてあげた。

「へへ…………あの宇宙連合なかなか強かったよ…………、
馬鹿にはできないよ……………」

そう言い、サイレルは眠ってしまった。

エルマはサイレルが眠るのを見ると、笑って、サイレルの部屋へ向かった。

続く。

第6話 勇者の敗北 - 06 (終) (後書き)

次のお話

バツダーズ四天王との戦いで負傷したディバイガン達。

そのディバイガン達を看護するために破滅勇者隊の隊員達がやってきた。

第7話 危機には逆転がつき物

ソードキング、ガーディアンクイーン、グライドエース登場！

須田「今回は、勝君たちは怪我なので私たちがあとがき部屋をやり
ますー!!」

紀香「・・・・・・・・・・」

須田「どうしたの？紀香ちゃん？」

紀香「・・・・・・・・あっ！！いえ・・別に・・・・・・・・」

須田「勝君の事心配なんでしょう？」

紀香「な・・・・・・・・違いますって!!」

須田「顔赤くなってるわよ」

紀香「・・・・・・・・もう！からかわないで下さい!!」

須田「はいはい．．．．．かわいいやつ」

作者「女子達ってコイバナすきなんだな．．．．．」

次回&意見感想是非！！お願いします！！！！

第7話 危機には逆転がつき物 - 01

太陽系より遠く離れたブレイブ星系に存在する宇宙連合本部『アマーズ・フェルード』外観は白で、中心の球体からさらに5つの球体に分かれている。

宇宙連合総本部長ベイラスは、悩んでいた。

「うゝむ．．．．、破滅勇者隊が敗れてしまったか．．．．．
」

ベイラスは机に置いてある飲み物を飲み真剣な表情で窓を見た。

すると、ベイラスの部屋に副総本部長ゲルターが姿を現した。

「どうするのですか？総本部長？」

ゲルターは焦りながらベイラスに聞く。

「．．．．．、地球に？彼らを送ろう。」

その言葉を聞き、一瞬ゲルターは驚いたが、すぐに頷き行動を開始した。

「．．．．．頼んだぞ。ディバン君。」

ベイラスは、席から立ち上がり窓のそばにより地球を見つめた。

「3人には今より地球へ行き、ディバイガン及び、スーパージャック、デメルスの保護に行ってもらおう」

副本部長のゲルターは3人の超機人にそう伝えた。

「え．．．わかりました．．．．．」

女性のような形をしている超機人がそう言った。

彼らは、破滅勇者隊の隊員である、ソードキング、ガーディアンクイーン、グライドエース。

3人はスーパージャックの兄弟に当たる存在である。

「わかったなら、今日地球時間午前2時12分34秒に発進してくれ！」

その言葉を聞くと3人は「了解^{うしやー}」と言い、準備を始めた。

「まさか．．．．．こんなに早く行くとは．．．．．」

グライドエースは面倒くさそうに準備しながら文句を言っていた。

「まあ、弟達の聞きなんだから私たちが言ってあげないと可哀想じゃないねえ、お兄さん」

ガーディアンクイーンは、ソードキングにそう言った。

「ああ、私たちもそろそろ全面的にバッダーズと戦わなければならないからな！」

ソードキングはそう言いアーマーズ・フェルダ5ブロックのBハッチをゆっくり開けた。

すると、電子モニターでベイラスの顔が映った。

「3人とも頼んだぞ!!」

そう言い残し映像は切れた。

3人はソードキングの合図と共に一回合体を解除して、広い宇宙へ飛び出した。

6時間もの長旅を終えて、何とか地球につく事ができた。

パトカーのキングポリスはヒューマノイドモードになり辺りを見回した。

「ふむ。ここが地球か……………」

青く澄み渡る海が続き、あちらこちらでは緑が咲き乱れてる。ここが地球。

6人の機械超人たちは感動していた。

そうしている暇もなくすぐさまに、ディバンたちがいる極東の島日本へ向かった。

勝は目が覚めた。

つい先程まで何をしていたか思い出そうとしても頭痛がして思い出す事ができなかった。

「・・・・・・・・・デイバイガン？」

勝はコックピットの異常な暗さに驚いたいつもならもっと明るいはずなのに・・・・・・・・。

勝は何度もデイバイガンに呼びかけるが全く反応は無かった。

カイザーモバイルも画面が割れていて、全く使い物にはならなかった。

「くそ・・・・・・・・、何があっただっけな・・・・・・・・？」

痛む頭を堪えて、思い出そうとした。

「そつだ・・・・・・・・、俺負けたんだっけ・・・・・・・・」

先程までの戦いを思い出した。

最後にジエンドオブクラッシュを喰らってから記憶が無いどうやら気絶してしまったらしい。

あちこちを見ると、無残になったスーパージャック、デメルスが転

がつている。

全て自分の無力さのせい……勝はなんともいえない気持ちになった。

すると、前方から地面を揺らす音がしたので、勝はあわてて前方を見た。

そこには6人の超機人がこちらへ向かって歩いてきていた。

続く

第7話 危機には逆転がつき物・01（後書き）

一旦紹介

ソードキング

パトカーから変形するキングポリスと、ヘリコプターから変形するキングヘリスが合体して完成する。

機体は黒と白を貴重としている。

ガーディアンクイーン

スポーツカーから変形するクイーンファスルと、スペースシャトルから変形するクイーンスペースが合体して完成する

ピンクと白を貴重としている。

ストライドエース

消防車から変形するエースフレームと、新幹線から変形するエースライナーと合体して完成する。

赤と黄色を貴重としている。

今回は兄弟順を発表します。

第7話 危機には逆転がつき物 - 02

「なんなんだ……あれ？」

勝は迫り来る6人の超機人に戸惑っていた。

勝はどうする事もできない。このままではやられる気がした。

「どうしよう……」

勝は慌てた。

すると、6人は分担してデイバイガン、スーパージャック、デメルスを囲んだ。

「俺達の事殺す気なのか……」

勝は思わず目を閉じたが、6人はなにもせずに各超貴人を持ち上げ始めた。

その反動で、勝は頭を打ち気絶してしまった。

関東のある湖が割れると、宇宙連合が地球に配置した基地が姿を現した。

まるで白い城を思い浮かべるような要塞であつた。

そこに、ディバイガンを運ぶキングポリス、キングヘリス、デメルスを運ぶクイーンファルス、クイーンスペース、スーパージャックを運ぶエースフレイム、エースライナーはそれぞれ基地内部に入っていた。

6機はそれぞれ合体した。

「ふう〜結構大変だったな・・・」エースが3人の無残な姿を見ながら言う。

「ああ・・・・・・・・・・それにしても・・・・・・・・大丈夫なのか？ジャック・・・・・・・・・・」キングは心配そうにジャックを見る。

「大丈夫よキング兄さん。ジャックは私たちの中でも末っ子だけど、絶対大丈夫よ」

クイーンは強気に話した。

すると、奥から一人の中年男性が現れた。

「3人とも良くやった。格納庫に戻ってもいいよ」

男はだばだばの白衣を着用していた。大きな黒ぶちめがねをしていて、髪もそこまで豊かとはいえない。

「いえ、大崎博士、弟の一大事なのに私たちだけ休むなんてできませんよ」

クイーンの言葉に大崎と呼ばれる男は静かに笑った。

「なら手伝って欲しい事があるんだ、キングとエースは、格納庫より、蘇生ボトルを持ってきてくれ！そして、クイーン3人をいつでも蘇生ボトルへ入れられるように準備をしてくれ」

「「「^{うじゃー}了解！」「」」

3人はすぐさまに行動を開始した。

エースとキングは、超機人でも通れる広い廊下を歩いていた。

「キング兄さん、ジャック達大丈夫だね、クイーン姉さんも言っていたんだからさ！」

エースの問いにキングは何も答えなかった。

「兄さん……何か言つてよ……」

キングが重い口を開いた。

「確かに蘇生ボトルに入れば直る確率はある、だが……成
功確立は今までの事例から計算すると20%なんだよ……」

キングの言葉にエースは驚いた。

「そんな……じゃあ、ジャックはもう元に戻らないかもしれないの？」

エースの言葉にキングは頷いて答えた。

「そんな……事って……」

エースは言葉を失い、歩くのが遅くなる。そんなエースを見てキングが口を開いた。

「でも、20%の確率がある、0ではないんだから、助かるかもしれないんだから、私たちが早く蘇生ボトルを取りに行こう！」

「兄さん……はい！」

2人は、急に走り出した。

数十分して、蘇生ボトル3個を持ったエースとキングが帰ってきた。

「よし、それをすぐさま向こうの専用機械に設置してくれ！」

キングとエースは大崎に言われたとおりに動いた。

「では、3人を中に入れますよ？博士」

クイーンという言葉に大崎はタイピングをしながら頷いた。

2人が設置したのを確認すると、ボトルから赤紅色の液体が流れ込んできてデイバイガンたちを浸した。」

「博士……どうですか？」

「今のところ順調だよ」

大崎は笑顔で言った、それを3人は見てほっと一息ついた。

バッダーズ本拠地では次なる襲撃の準備が行われていた。

「では……………、発進準備を進めろ！」

ボルフェンがオペレータに言う。

バッダーズ本拠地から地球に向かって再び青い光が放たれた。

第7話 危機には逆転がつき物・02（後書き）

兄弟順

ソードキング長男

←

ガーディアンクイン長女

←

ストライドエース次男

←

スーパージャック三男でございます。

また、新たに龍王^{りゅうおう}燐牙^{りんが}カイザレスを連載開始しました。

あらすじです。

天才予言少女香坂ジュリの予言は驚くものだった。平和になったはずの地球に再び悲劇が訪れる。邪悪龍の復活そして、地球崩壊へのカウントダウンが始まる。青年大童タツキは、龍の覇者カイザレスに選ばれ、聖なる勇者として地球の存亡を懸けた戦いに挑む。ロボットSF小説です。

破滅勇者ディバイガンと共によろしくお願いします。

第7話 危機には逆転がつき物 - 03

3人は確実に機体が修復を始めた。

「うむ、どうやら調子がいいようだな」

大崎は3個の蘇生ボトルを見て、安心したように紅茶を啜る。

「博士、もう大丈夫なんですか？」

エースが明るい声で大崎に聞くが、大崎は首を横に振った。

「いや、まだわからないよ。ここから急に異常事態とかおきて、二度と元の体に戻らなくなる場合もあるからね」

大崎は、そう説明して、再びタイピングを始めた。

「どうだ、襲撃者達は今のところ何処にいる？」

ボルフェンはバツダーズ本拠地の司令室にいた。オペレーターが、画像確認してからボルフェンに話した。

「どうやら地球時間で約20分後太陽系に突入し、その又10分後に大気圏を突入する模様です。」

ボルフェンはその事を聞き、笑みをうかべた。

青い光が大気圏内に突入した。そして、日本上空に到着すると、しばし止まった。

すると、青い光は何かを見つけたように急に行動を開始した。

その先には、新幹線があった。

ものすごい地響きが基地を襲い、大崎は思わず椅子から落ちてしまった。

「一体何なんだ………?」

大崎は、ゆっくり立ち上がりながら天井を見上げた。

「わかりません………、もしかしたらバツダーズの襲撃かしら?」

クイーンも同じく上を見る。

すると、館内に大きな警告音が響いた。大崎はあわててモニターを見た。

「なにが………何?!」

大崎は絶句したなんと先程の地響きで蘇生ボトルに不祥事が生じたらしく、蘇生がストップしたらしい。

「何があつたんですか？」

キングが心配そうに聞く。エースも驚いた表情で聞く。

「どうやら、先程の地響きで蘇生ボトルに不祥事が起きたらしいんだ……」

大崎の言葉に3人は黙り込んだ。

地上では、バッダーズの新たな襲撃者、時計塔が暴れていた。

「チクタクチクタク……宇宙連合は何処だ……チクタクチクタク……」

時計塔の金の部分から黄色い衝撃波が放たれて、周辺の森林を一掃してしまった。

「どうやら、サイレル様の攻撃で死んだらしい……チクタクチクタク……」

時計塔は笑い声で言うと、都市部に向かってゆっくり歩き始めた。

「やはり、バッダーズか……」

キングは基地モニターに映る時計塔を見てつぶやいた。しかし、キングたちは蘇生ボトルの作業ですぐ発進はできない状況である。

「キング兄さん！こつちを手伝ってよ！！」

背中の部分にコードを3本つけたエースが叫ぶ。

先程の地響きで基地内部の電気回線の一部がどうやらショートしたらしく蘇生ボトルが動かなくなってしまったらしい。

なので、3人のエネルギーを供給せねばならないが、バッターズの襲撃も気になるところである。

キングたちは心配そうにモニターを見ながらエネルギー供給を続けた。

第7話 危機には逆転がつき物・03（後書き）

続く

わかんと思いますが、ただいまスランプです……。はい。

第7話 危機には逆転がつき物 - 04

「大崎博士！今のところ調子はどうですか？」

キングが大声を張り上げながら大崎に聞く。

大崎はパソコンをいじりつつ、頭をかきむしっている。

「……………今のところギリギリの35%の稼働率で動いている……………で、電気回線の方の復旧時間は約25分後と見られているんだ」

大崎の言葉を聞いたあと、キングはモニターを見た。

暴れ狂う時計塔は、今のところ都市部には近づいていないが、山や森林に大きな被害をもたらしている、間違いなくこのままでは都市部に進入し大きな被害をこうむるであろう。

キングはモニターを見つつ拳を強く握った。

時計塔は相変わらず自然を破壊し続けた。ただひたすら、狂ったように……………

「この地球に……………自然なんていらない……………チクタクチクタク……………」

ドンドン木が燃えて炭になっていく……。

「よし、撃てえ!!」

自衛隊の上官の叫びと共にロケットランチャー、戦車のキャノン砲が轟音を上げる。

それは、怪物に当たると共に爆発を起こす。

「やったのか?!」

自衛隊の上官は目を細めて、双眼鏡を覗く。

爆煙のせいで良く姿を捉える事ができないが、都道府県3県を破壊できるくらいの破壊力のある攻撃をしたのである無事であるはずが無い。

上官はニヤツキながら、煙が引くのを待った。

一筋の光が、戦車に当たった。戦車は当たると同時に大爆発を起こした。

自衛隊の悲鳴、叫びが聞こえてくる。上官は絶句した。

無傷の時計塔は再び破壊及び、自衛隊への攻撃を始めた。

「あのままでは、あそこにいる人間は全員死んでしまう……」

エースはモニターを食いつくようにズット見ていた。このままでは間違いなく危ない。

しかし、エネルギー供給を中止するとディバイガンたちは二度と復活しなくなる。エースたちは物ぐるしい気持ちになった。

「大崎博士……このままでは……私たちの任務のひとつ地球を守る事が……」

キングの言葉に大崎も頷いた。

「わかっている、私も君達を早くあそこに送りたいたんだしかし、君達もわかるだろう。副隊長であるディバイガンたちをここで失うわけには行かないんだよ……」

大崎の言いたい事もキングたちにはわかる。でも人々を守りたいそんな気持ちが強かったのである。

「……大崎博士……ひとつ提案があります」

キングが急に話し始めた。全員はいっせいにキングの方を向いた。

「私とクイーンを置いて、エースだけ、バツダーズがいる場所に送りエースが戦闘をしている間私たちが供給し、終わり次第すぐに戦闘に参加する……どうでしょうか？」

キングの言う作戦に反対するものは誰もいなかった。エースはすぐに合体解除をすると、外へ出た。

しかし、これには大きなリスクがあった。エースがいなくなる部分

キングクイーンにかかるエネルギー消費量は、約1・5倍となる。
先程のでもかなりきついものである。

キングとクイーンはそれを承知でこの作戦を実行したのであった。

数分後ストライドエースは、時計塔の目の前に現れる事ができた。

「そこまでだ！！バツダースー！！」

ストライドエースの叫びを聞くとゆっくり時計塔はエースのほうを
向いた。

「宇宙連合・・・・・・・・チクタク・・・・・・・・我々の邪魔者・・・・・・・・
・チクタク・・・・・・・・」

「へっ！お前をすぐに倒して、キング兄さんの負担を少しでも多く
減らす！！」

ストライドエースは背中からエースランサーを取り出した。

続く

第7話 危機には逆転がつき物・04（後書き）

次部、とうとうバッダーズとの戦闘に入ったストラドエース。

エネルギー供給を必死に行うソードキング、ガーディアンクイーン。

果たして3人の運命は？

そして……ディバイガンは？

ご期待ください。

意見感想是非是非！！お願いします。

【お知らせ！】熾烈戦隊リベンジャーズの作者であるMETRONさんに破滅勇者ディバイガンの中から、ディバイガンとアディルバを描いていただきました！

小説家になろうの秘密基地の新しいラストコーナーのMETRONさんのページにあります。是非ご覧ください！！

第7話 危機には逆転がつき物 - 05

「チクタク……チクタク……」

時計塔はゆっくり眩きながらストライドエースを見ている。

エースは、肩のストレッチをしてエースランサーを握りなおした。

「行くぜ！！エースランサーアアアアアアアアア！！」

エースランサーの刃先が光り輝く。刃先はまっすぐ時計塔に向かっていく。

「チクタク……決めた」

時計塔はそう呟くと、腹部の鐘でエースを吹っ飛ばした。

エースは勢い良く飛び地面に叩きつけられるが、しっかり立ち上がる。

「そう簡単にはやられない！！」

エースがランサーを再び構えると時計塔は笑い声で何かを呟いている。

「くくく……決めた……ククク……」

「何を決めたんだ？！」

エースは怒鳴りつけるように時計塔に聞く。

「ちくたく……お前を5分以内にやっつける……ちくたく……」

その言葉を聞き、エースは自分を馬鹿にした事に怒りがこみ上げてきた。

「テンメー！！俺の事をそう簡単に倒せるものか！！」

上空へエースが飛ぶ、回転しながら時計塔に突っ込んだ。

「くらええええ！ランサートルネードオ！！」

ものすごい回転で突進するエースしかし、時計塔は簡単にエースを受け止め投げた。

「チクタク……そんな腑抜けの攻撃なんて効かない……
・・チクタク」

時計塔は余裕の表情を浮かべている。

「クッソーー！！ランサーブーメラン！！」

エースはエースランサーを時計塔に向け投げつけた。

「チクタク……時針ブレード……」

時計塔は自身の顔についている時針を取り出しそれを巨大化させた。

時計塔は時計針ブレードでエースランサーを跳ね返した。

跳ね返されたエースランサーを必死に握った。

このときストライドエースの中では異変が起きていた。

蘇生ボトルへのエネルギー供給によりストライドエースのエネルギーはもう残り半分以下なのである。したがって、無駄な攻撃無駄な動きができなくなっているのである。

「く…………どうすればいい？…………絶体絶命じゃないか……………」

ストライドエースは立ち上がる。しかし、時計塔にどのような攻撃をすればいいのかわからない。

「チクタク…………残り2分半…………チクタク……………」

「

時計塔はゆっくり歩み寄ってくる。ストライドエースはランサーを構える。

「…………どうする？…………どうする？」

ストライドエースにだんだんと焦りが出てくる。

だが、時計塔はまってくる物ではない。

「ベル・クラッシュ……………」

ベルのものすごい音響がストライドエースを襲った。思わずエースは頭を手で抱える。

「く…………何なんだこの音は？」

エースは時計塔に向かって叫ぶ。

「チクタク…………これはお前への鎮魂歌だ…………」
レクイエム

時計塔はそのまま時計ブレードを右手だけで持ち今度は分針を取り出し、剣へと変えた。

「時計ブレードと、分針ブレード…………はたして…………くく…………」

2本の剣先がストライドエースへ向けられた。

「ここまでなのか……………」

エースには十分なエネルギーがもう残ってない。このまま終わってしまうのだろうか？そんな不安が生まれてきている。

「さらば……………」

二つの剣が振り上げられた。

第7話 危機には逆転がつき物・05（後書き）

作者「ひさびさにあとがき部屋に来たけど……」

サイレル「てんめく、サボってたな!!」

勝「本当だよ!面倒くさいからって放置しやがって!!」

須田「私はここでしか出番がないのですよ?」

ボルフエン「ふ……全く最低な奴だ」

作者「そんなに言わなくても……次回&意見感想……ぐす……是非是非!お願いします!!」

全員「宣伝してんじゃない!!」

第7話 危機には逆転がつき物 - 06 (終)

「くっそおおおおお……………」

ストライドエースは両手を体の前に出すと言う抵抗しかできなかった。それを無視して振り下げ始める。

ストライドエースが気づくと2本の剣の刃は見事に粉々に砕けていた。

「何者……………!!」

そこには、ソードキングとガーディアンクイーンがエネルギー供給を終えてストライドエースの元へやってきたのである。

「大丈夫か!……………エース!!」

キングが必死に叫んでいるものの、キングたちのように勇者を乗せないものたちにとってはエネルギーを吸い取られる事はとても辛く色が薄くなってしまう。

「何故来たんです?!ここは私に任せてくれれば……………」

エースの言葉を聞くとキングたちは無視をしてキングソードと、クイーンシールドを取り出した。

「そいつのは今の状況をどうにかしてから言つものだ!行くぞ!」

そう言いソードキング達は時計塔に仕掛けた。

「ソードクラッシャー!!」

ソードキングのキングソードの剣先から黄色い光が無数に放たれ時計塔を襲い爆煙で時計塔は一瞬見失われる。

「まだあまだああああ!!!!」

ストライドエースはエースランサーを構えて、一気に攻めようとすると、煙の中から青い一筋の閃光が放たれる。

「なんだって?!」

エースは避けられず思わず両手を前に出すと目の前にクイーンガーデアンがエースシールドを体の前に出す。

「大丈夫かしら? エースこの調子じゃすぐやられちゃうじゃない?」

「すみません……なら見せます!!」

クイーンに返すとストライドエースは空中へ舞った。

時計塔は上空を見つめる。

「チクタク………予定外………想定外………許されない事態………」

時計塔の鐘の振り子の速さが早まってくる。そして鐘に高エネルギーが多く集まってくる。エネルギーが充分に溜まると一気にそのエ

エネルギーを開放した。

「何を………?!」

ストライドエースは、空中で動きをとれずにエネルギー波が迫ってくる。

「危ないわ!! エース!!」

ガーディアンクイーンが最後のエネルギーを振り絞って上空へ飛び、クイーンシールドを身体の前に出してストライドエースを守るようにした。

「クイーン姉さん!!」

ものすごい量の高エネルギーがガーディアンクイーンを襲う。そのままシールドにひびが少しずつ入っていくのがわかる。

エネルギーを何とか振りぬけると同時にガーディアンクイーンが地上に落ちていった。それを確認すると同時にソードキングがガーディアンクイーンを地上で受け止めた。

「エースこっちは私に任せろ! お前は奴に止めをさすんだ!」

「了解! 行け!! バッダーアアズ!!」

ストライドエースは空中でエースランサーを構えると同時にランサーを軸にして回転を始めた。

「うおおおおおお! 回転! 超斬空!! 激流波!!」

エースはそのまま高速回転したまま時計塔に突っ込んだ。それと同時に時計塔は再び鐘にエネルギーをため始める。

「そんなものおおおお！！今の俺には効かない！！」

「チクタク・・・・・・・・そんなもの・・・・・・・・計算外だ・・・・・・・・チクタク・・・・・・・・！！」

再び高エネルギー波が時計塔の鐘から発射された。エネルギー波はまっすぐストライドエースに向かって一直線に伸びていった。

そしてエネルギー波は、ストライドエースを襲った。しかしストライドエースはものともせず突っ込む。

「チクタク・・・・・・・・なんだ・・・・・・・・」

一瞬で時計塔の胴体に一つの大きな穴が開いた。ストライドエースは少し着地に失敗したが、何とか体制を直して時計塔を見た。時計塔はそれと同時に爆発を起こした。

「エースよくやったなあ・・・・・・・・」

エースはゆっくり立ち上がってキングの方向を見た。

「兄さん・・・・・・・・これが俺たちの新たな敵バツダーズと言うわけですね」

ソードキングは静かに頷いた。

「その前にだが．．．．．隊長天下勝に最終試験をやってからだ．
．．．．．」

「最終試験．．．．．？」

ソードキングはそこから無言で基地へ帰っていった。

第7話 危機には逆転がつき物 - 06 (終) (後書き)

次のお話

何とか蘇生ボトルで復活したディバイガンとスーパージャックとデメルス破滅勇者隊

勝もサイレルにやられた傷を癒す事ができたものの大崎から意外な一言を言われた。

「宇宙連合総本部長よりの伝言で今日付けで君は破滅勇者隊隊長を解任する事に決めた」

勝は思わず基地から飛び出し、ディバンと出会った小屋に行く。そこで出会ったのは・・・

次回第8話 一人の勇者として

勝「やつとこか・・・・・・」

作者「申し訳ないけど、絶対に完成させる。今年は受験で忙しいけど極力頑張ります!」

第8話 一人の勇者として - 01

『・・・・・・・・・・勝』

なにかが自分を呼んでいるのわかる。勝はゆっくりとまぶたを開いた。目の前には何が広がっているのかはわからないが何か暖かった。

『天下・・・・・・・・勝・・・・・・・・選ばれし勇者よ』

『誰なんだ・・・・・・・・？俺を呼ぶのは・・・・・・・・？』

勝が呼びかけても何者も姿を現さないので少し気味が悪くなった。横を見回してもそこには無しかない。

勝は今時分が置かれている状態が何なのかわからなかった。逆に何もわからない事に恐怖感を感じていた。

『天下勝君にとっての正義、勇気とは何なんだ？』

『俺にとっての正義・・・・・・・・、勇気・・・・・・・・？』

急に聞かれたことに勝は顔を歪めた。勇気なんてただの自分を元氣付けるような言葉だけだと思っていたがデイバイガンたちが現れてからそう簡単なものではない事がわかったがどうかはまだわからない。

『君はまだその二つを理解してない。だから君は戦いの中で恐怖が生まれてくるんだ』

戦いの中の恐怖。自分では全く自覚していなかった。自分のせいで何回かデИБাইガンたちを危機にさらしていたことはわかっていた。

「わかってるけどさ……戦いなんていつも恐怖を背負っているものじゃないのか？」

『違う、やはり君は気付いていないのだな……。君はまだ気付いてない』

その言葉に勝は驚きの表情を見せる戦いの意味なんて地球から守るために死などの恐怖を背に闘うものとしか思っていなかった。

「じゃあ……。なんだって言うんだよ!!」

『私は君にそれを教える権利は持っていない。しかし、戦い抜くんだけ。君は負けてはいけないそして戦いの中でいずれわかるはずだ』

すると目の前の方に光が集まってきた。その光のまぶしさに思わず勝は目を細めた。

「勝……。目覚めたか？」

そこにはデИБাইガンが心配そうに自分を見ていたのでそれに応えようと体を起こした。やはりいたるところに痛みは残っているが目立った外傷は無くなっていた。

「そうか……。無事だったか……。良かった……」

・
」

ディバイガンの笑みがなんとなく見えた気がした。俺も微笑み返した。そんな俺のところには一人の中年男性が歩み寄ってきた。

「君が破滅勇者隊隊長の天下勝君か」

男は物難しそうな顔で勝の顔を見ていた。勝は少し睨んでくる老人に対し少し疑いの目を持った。

「君に告げなければならない事があるんだ。心して聞いてくれ」

その言葉に勝は少しためらいながらも一応頷いた。

「君は今まで石像、アオリイカ、パンダと3体の倒してきた事はこちらからしてもとっても嬉しい内容だ」

「・・・・・・・・どうも」

男の話に勝は一応感謝の言葉を言った。しかし男の顔はそれが本当の言いたい内容ではない事が勝にもわかる。

「しかし、君はいつも闘いの中でディバイガンをはじめ勇者たちに迷惑をかけているのはわかってるな？」

その言葉を言うと急に勝は黙り込んでしまいした唇をかむ。

「きみのせいで、ディバイガンたちは何度、ノーブレイブフォーム 勇気無力形態になったことか・・・」

勝は何も言うことができないしかし、男は話を続ける。

「そんな君の姿を見て宇宙連合総本部長は君に対してあることを決めた」

「あること………?」

勝は思わず口を開いた。殺されるのかもしれない、宇宙の果てに飛ばされるのかもしれないそんな事が勝の頭に浮かんできた。

「それは………君を今日限りで破滅勇者隊隊長を解任する」

「か………解任………」

勝は思わず啞然としてしまった。

第8話 一人の勇者として - 01 (後書き)

勝「作者さ、最近さあとがきのネタ無くない？」

作「……………うん、ない」

須田「きっぱりいった!!」

第8話 一人の勇者として - 02

『君はまだ戦いの意味を気付いていない』

何故だか勝の胸にその言葉が突き刺さった感じがしていた、解任まさかこんなになるとは予想をしていなかった。

「そ……そんな解任なんて……」

勝はまだ事実が受け止められないようで口がパクパクと動いている。

「悪いがこれは上の決めた事なんだ、私が今から取り消す事は不可能なんだ」

大崎が真剣な顔で話す。勝はカイザーモバイルをズボンの右ポケットから出した。

「で……でも俺がカイザーモバイルを持っているんですよ?!俺しか使えないんじゃない」

大崎は頷いた。確かに勝にしかカイザーモバイルは反応しない。

「だからそれはこちら側に返してもらおう事にしよう」

大崎はそういうと指をパチンと鳴らした。すると勝の右手の中に収められていたカイザーモバイルが小さな粒子となり上空へ消えていった。

「……………そんな……………」

勝は思わず膝を着く、自然に目から涙がこみ上げてきている。

「なんで……僕が今までどんな気持ちで戦ってたと思うんですか……」

勝の問いかけを大崎は返す。

「君は僕しかやれないから仕方なく戦うしかないとかしか思ってたていたのだろう？」

大崎の言葉に思わず勝は驚きの表情を見せる。

「……そんな中途半端な気持ちではこちら側も困るのだよ」

大崎の言葉に勝は何も言い返せなかった。ただ、突っ立っている事しかできなかった。

「しかし……大崎博士!!」

スーパージャックが大崎を止めるかのごとく首を突っ込んできた。

「悪いが、さっきも言ったように上が決めた事だ。私は何もする事ができないのだよ」

「……でも」

「スーパージャック、お前の気持ちもわかるがこれが彼の戦いの中で彼が掴んだものなんだ」

ソードキングの言葉にスーパージャックも下を向いて何もしゃべれなくなる。

「………なんだよ、勝手に破滅勇者隊隊長になれと言ったと思えば、解任だって？ そっちにしか都合が良すぎるじゃないか！！」

勝は、叫んでいた。胸が張り裂けそうになる。喉がひりひりとしていた。

「だから君を戦いと言う束縛から解放したのだよ」

大崎の言葉を聞いた瞬間勝は思わず外に飛び出していた。しかし勝を誰も追いかけてようとしなかった。

どこまで走っていけばいいのか、この先俺はどうなるのか。そんな事を全く考えずに勝はひたすら走っていた。足が痛いけど足は止まる事を知らない。

（俺は今まで何のためにたたかってたと言っただ！俺は何のために戦っていたと言っただ！）

勝の心の中でそのことばが繰り返されていた。

勝がふと立ち止まるとそこにはディバンとの出会った学校の裏山にある小さな小屋が前にそびえ立っていた。

勝は無心に扉を開けていた。古びた木のきしむ音が響く。

勝は静かに一歩一歩歩みながら小さな小屋に入った。

第8話 一人の勇者として - 02 (後書き)

意見感想お願いします！

第8話 一人の勇者として・03

勝は、ゆっくりと慎重に小屋に入った。入った瞬間木のおいが鼻に入り込んでくる。

ここが勝にとって全ての始まりの場所、ここから勝はディバンと出会って今までバツダーズと戦ってきた。

「・・・・・・・・ここから始まったんだよ・・・・・・・・」

勝は静かに深呼吸をした。今日の事は忘れよう、今までのことを忘れよう。もう今までのことに終止符を打ったんだ。もう思い残す事はないじゃないか。

勝は自分の心にそう言いかけた。自分は何も間違っていないと自分に言い聞かせた。

『君はまだわからないのか？自分の使命を・・・・・・・・？』

またあの声が頭に響いてきた。なんなのかわからない、辺りを見回すが当然勝以外の人はいない。

「だれなんだよ！俺の任務とか戦いとかなんなんだよ！俺にどうしろって言うんだよ！！」

叫ぶがその声はただ静かな小屋の中に響くだけである。

『私は今この場にはいない。』

「なら何処にいるって言うんだ！でてこいよ！！」

勝は興奮したように叫ぶ。意味もない事はわかっているのに叫んでしまう、それは勝自身もわかっていない。

すると、勝の目にふとあの時の扉が目に入った。

『コノ先勇氣ウシナイシモノノミ入ルベシ』

あの日と同じようにそう書かれた紙が扉に張られていた。まるで勝が来るのを知っていたように。

「・・・・・・・・入るしかないのか・・・・・・・・」

勝はドアノブを静かに回して開いた。階段が暗闇の中永遠に続いてるように見える。

何のためらいもなく一步一步歩み始める。

誰もいない階段の間では階段を降りる音が薄気味悪く響く。その音はなにかを勝に訴えかけているようであった。

『そうだ・・・・・・・・ここに来るんだ・・・・・・・・天下勝』

またあの声が聞こえる。勝はそれになれたように何も言わずにひたすら階段をゆっくり一段一段下りていく。

「・・・・・・・・おかしい・・・・・・・・このまえよりなんだか階段が長い・・・・・・・・」

勝はいまだに終わりの見えない階段の下のほうを見た。前来た時はもうデイベンとであつた部屋についていたはずであつた。

しかしつかない、一体何故なのであるうか、それは勝にもわからなかつた。

『もう少しだ、君はこんな所で諦めてはいけない。もう少しだ！』

（うるさい……うるさい……）

勝はだんだんとストレスが溜まってきていた。勝手に人の頭に入り込んでくるなぞの声。

勝は駆け足で階段を下りた。早くこの声の張本人に会い全てを聴きだしたかつたからである。

駆け足で降りると2、3分で一番下に着くことができた。目の前には扉がある。

『勇気ウシナイシテンカシヨウノミ入ルベシ』

どう見ても自分を誘っていた。勝はそれを見て静かに笑つた。

「……やってやる！俺の戦いを聞き出してやる！」

勝は勢い良く壊れんばかりに扉を開いた。

「来てやつ……！！」

勝が叫びながら入ろうとしたが、思わず声が出なくなってしまう。

「よくぞ来たな勝、いや選ばれし勇者天下勝よ!!」

なんと目の前には自分の父である天下てんかはじめ一が勝を待ち構えていたのであつた。

第8話 一人の勇者として - 04

一方宇宙連合地球基地ではいまだに静けさが残っていた。

「・・・・・・・・何故なんですか・・・・・・・・勝はこれから成長をするところだったのに・・・・・・・・」

ディバンは下を向きながら呟いていた。パートナーが急にいなくなってしまうディバンはこれ以上ない。

「ディバン・・・・・・・・」

デメルスはそれを見てなんともいえぬ気持ちになっていた。自分にはパートナーの赤城がいるが、彼にはもういない。

「・・・・・・・・では、破滅勇者隊の新隊長は赤城浩次に任命したいと思う」

大崎は赤城の方を見てそう言った。赤城は答えるように首を頷かせた。

赤城はエンペラーモバイルを開いた。そこには各機の合体コードが表示されている。

ディバイガンへ合体する破滅合体の821のコードが何故自分の元にあるのかわからない。

「大崎博士・・・・・・・・なんで勝を解任したんですか？」

大崎は何も言わずに椅子に座って何かの資料を見ている。

「何でもいわないんですか?! 隊長だけをやめさせればよかったじゃないですか!」

それでも大崎は何も言わずに作業を続けるだけである。それに赤城はしびれを切らした。

「何か言ってくださいよ! これじゃ納得がいかないじゃないですか!」

赤城は大崎の机を両手で強く叩いた。これには大崎も驚いたように赤城を見た。

大崎は一つ溜息をしてから赤城に話し始めた。

「彼にはまだ自覚が足りないのだよ、だから彼には……」

大崎は何かを言いかけてから椅子の腕かけ部分のボタンを押して地下に降りた。

「……大崎博士……」

赤城は大崎の机を見てただ考える事しかできなかった。

バッターズ本拠地では、サイレルが窓から地球を見ていた。

「どうした・・・サイレル・・・」

ボルフェンがサイレルのそばに歩み寄りながら話しかけた。

「・・・いや、地球の宇宙連合の隊長が辞めたのが許せなくて・・・」

サイレルは親指の爪を噛みながら再び地球を見た。そんなサイレルを見てボルフェンは少し微笑んだ。

「そいつは貴様のライバルであつたのか？」

サイレルは少しためらいながらも首を頷かせた。サイレルはそれを見て鼻で笑った。

「大丈夫だ。貴様のライバルはすぐに帰ってくる・・・」

ボルフェンはそう言い残すとサイレルの部屋から出た。

工事現場では地下の補修作業を行っていた。

「地下の様子はどうなっている？」

工事現場の職員は腰に装備されているトランシーバーを取りながら地下の作業をしている仲間に連絡をする。

『作業は順調・・・ガツガガなん・・・ガガ助けて・・・ガガア』

連絡の最中に何かあったらしくノイズが混じりながら助けを求めていることがわかる。

「どうした？もう一度通信をしろ！！」

男がトランシーバーに向かい大声で叫ぶ。

『………恐竜だ！！ガガガ………恐………ガガガあば………れガガウアアアアア………ガガガガ』

そうして連絡は途絶えた。男が地下にもぐるために掘った穴を見つめる。

すると轟音を立てて地下から恐竜の化石が地面を壊しながら地上に出てきた。

「グオオオオオオオ！！地球連合は俺様が噛み砕いてやる！！グルオオオオオオ」

恐竜の化石は雄たけびを上げた。T-レックスの外見の巨体から発せられる音響で地面にはひびがはいていた。

第8話 一人の勇者として - 05

恐竜の化石は大声で叫びつつ町に向かって歩き始める。

「ウグオオオオオオオオ！！！宇宙連合！殺す！！」

一歩一歩重い足を動かしながらまちを目指す。

「・・・・・・・・隊長、敵ですよ・・・・・・・・」

ディバンは画面を見ながら赤城に向かって呟いた。赤城もそれを見て頷く。

「よし・・・・全隊員出撃だあ！！」

赤城はデメルスにブレイブフュージョンして乗り込むとすぐに基地から出発した。それに続くようにソードキング達も発車した。

数分してバッダーズのいる都会の近くの森が広がる場所に着いた。

「よし、ソードキングたちはあっち側の道の補修及び人を救出してくれ！」

赤城はエンペラーモバイルでそう命令をした。それを聞くとキング、クイーンジャックエースの4機はそれぞれの方角へ飛んだ。

「デメルス！ディバン俺達はバッダーズの動きを止めてかつ破壊するぞ！！」

「「了解！！」
ラジャー」

2機はゆっくり地面に降り立った。それを確認すると恐竜の化石は動きを止めた。

「バツダース！貴様の悪の魂を葬りに来たぞ！」

ディバンが指を恐竜の化石に指しながら叫んだ。

「ウグオオオオオ！！貴様らにそんな事はできるはずがない！！」

恐竜の化石は火の玉をデメルス、ディバンに向かって吐き出した。
2機はそれを飛んで避ける。

「行くぞ！ディバン！！」

「わかった！！デメルス！！」

ディバンは膝からDナイフを取り出してデメルスはシルバーブレイドを出した。

恐竜の化石はそれを見ると再び火の玉を吐き出した。今度はランダムに数十発はいてきた。

「そんなものは効かない！！Dナイフの威力を思い知れ！！」

Dナイフを構えるとディバンは自分の方向に向かってくる火の玉をDナイフで一刀両断し避けながら恐竜の化石の方へ向かっていった。

「ウグオオオオオオオ！！殺す！！！」

恐竜の化石はディバイガンの右腕に向かって噛み付いてきた。

「ぐあああああああ！！！！！」

ディバンの右手に恐竜の化石の牙がめり込んでくるのに対しディバンは思わず叫んでしまっていた。

「ディバン！！大丈夫か！！」

デメルスが一目散にディバンの元へ向かう。

「このつおおおおお！！」

赤城はレバーを巧みに操る。デメルスはシルバーナイトを頭の上に振りかぶる。

「喰らえ！！シルバーブレイドオ！！」

デメルスの握るシルバーブレイドは勢い良く恐竜の頭の首部分に振り落とされる。見事に恐竜の化石の頭は地面に転がり落ちた。

「すまない・・・デメルス・・・」

ディバンがそういうと気にするなといい恐竜の化石の方を見る。

すると、切り落としたはずの化石が勝手に動き始めてもとの姿に戻った。

「な・・・・・・・・アイツの頭が戻ったぞ・・・」

赤城は恐竜の化石の修復に驚かされて目が点になっていた。

「ウグググウルルルル・・・俺様は不死身だ！」

恐竜の化石は再び大声で雄たけびをあげた。デメルスとディバンは一瞬ためらう。

「なら・・・・・・・・ディバン・・・・・・・・合体だ！」

ディバンはその言葉を聞くと頷いた。イガールも山の方からやってくる。

「コード821！！破滅合体！！」

赤城がエンペラーモバイルにコードを入力して挿入しようとした。しかしエンペラーもバイルを入れようとした瞬間手から離れて落ちてしまう。

「・・・・・・・・受け付けないのか？」

赤城は自分の右手の手の平を見てそう呟いた。

第8話 一人の勇者として - 06

「勝久しぶりだな……………」

天下一は久々の息子との対面に感動しているようであった。しかし勝は父の顔を見ようとせず下を向いている。

「あの声は……………父さんだったの？」

勝が一に聞く。その事に一は少し黙るが、「ああ」と声を出す。

「何なんだよ父さん！俺の戦いつて！任務つてなんなんだよ！！教えてくれよ！！」

勝は今まで思っていた事をぶちまけるように言った。何故自分自身が戦わなければならなかったのか、バッダーズとの戦いの意味とはなんなのか。

「……………私からも聞くがお前は何故ディバンとともにバッダーズと戦うことを決めたのだ？」

一の質問に勝は驚いたような表情を見せる、勝は少し考えてから口を開いた。

「俺しかいなかったから……………ディバンに乗ってバッダーズと戦い地球を護れるのは俺しかいないと思ったから……………」

勝は相変わらず下を向いている。白い着衣物を着てフードをかぶっている一はただ勝を見ているだけである。

沈黙が続く。勝は絶対口を開こうとせず下を向いているだけである。

「なんで今頃父さんが日本ニッポにいるんだよ……なんで家族を捨てたとか言いながら戻ってきたんだよ……」

勝が先に口を開いた一はその言葉を聞くと同様もせずに話し始めた。

「確かに5年前私は家族を捨ててアメリカに飛んだ。しかし今日この日戻ってきた理由は勝お前に真の戦いの理由と使命を伝えるためだけだ」

勝はその言葉を聞き怒りを覚え思わず拳を一の顔に殴りかかろうとする。しかしその拳は一の右手に止められた。

「お前は何故今殴ろうとした？何のために私を殴ろうとした？」

そんな一の言葉に勝は思わず顔を緩める。

「今お前は愛するもの……家族のためにこの私を殴ろうとしたんだろっ？」

勝は拳を降ろして無言となる。一は笑みを浮かべる。

「そう、お前の真の戦いは愛するもの母星地球を守ること、使命はラクラス・バッダーを破滅させる事だ。それさえわかればお前はもっと強くなる」

「父さん……俺……」

勝の頭に一は手を置き左右に動かし頭をなでた。

「わかってる、でもお前の心^{ハート}がそんなじゃ仲間達に迷惑をかけるだけだぞ？」

勝は腕で顔を拭くと決心したように入ってきた扉の方に向かい歩き始める。それを一は止めた。

「待て……忘れ物だぞ勝」

一の右手には勝が破滅勇者隊の勲章のカイザーモバイルがあった。勝はそれを受け取った。

「行ってくるよ！父さん！」

「ああ、地球の未来のために頑張ってこいよ！」

勝は頷くと駆け足で階段を上りディバンたちの元へ向かった。

「ウアアアアアア！！」

ディバンは火の玉を腹部に直撃を喰らい吹っ飛んでしまった。

「ディバン……クソオ！浩次どうすればいい？」

デメルスは何とか立っている状態で赤城に話しかける。

「……どうすればいいんだ……どうしよう……」

赤城は頭を抱え込んでしまった。あちらこちらには合体が解けたジヤックたちが転がっている。

「グルアアアアアア！俺様は不死身！絶対に負けない！！」

恐竜の化石は大声で叫ぶとデメルスのほうを見た。

「次は貴様だ！グルウウウウウ！！」

その時であつた。下のほうで青い光が見えた。赤城は何故だかわからなかったが勝と確信した。

「ブレイブフュージョン！！」

勝は叫ぶと同時にディバンのコクッピトルムにワープした。

「勝……何故ここに……？」

ディバンは帰ってきた勝に驚きを隠せなかった。

「今はそんな場合じゃない！行くよ！コードオ821！破滅合体！！！！」

「「ラジャー了解」」

ディバンとイガールは上空で破滅合体を行いディバイガンへと合体を遂げた。

「外道！貴様をぶち倒してやる！！そして地球を守る！！」

勝はしっかりとレバーを握ってモニターに映る恐竜の化石を睨んだ。

第8話 一人の勇者として - 07 (終)

「行くぞ！バツダーズ！！」

勝は勢い良くレバーを前に押し倒すとディバイガンは勢い良く前に飛び出した。あまりの速さに恐竜の化石は身動きを取れない。

「はああああ！！」

ディバイガンの右手が恐竜の化石の頭部に直撃する。

「グロオオオオオオオ！！」

恐竜の化石は悲鳴を上げるがディバイガンは攻撃の手をやめない。

「ディバイシヨットオ！！」

無数の銃弾が恐竜の化石を襲う。恐竜の化石に穴が開く。

「ディバイガン！！ギガクラッシュパンチだ！！」

「了解！！ギガクラッシュャーセット！」

ディバイガンの右手にギガクラッシュャーが装備される。恐竜の化石はまだ気付いていない。

「喰らえええ！！ギガクラッシュパンチイイイイ！！！！」

ディバイガンの右手に青い光が集まり、それが鉄拳とともに恐竜の

化石に解き放たれた。

爆発音が響く。デメルスに乗る赤城は勝のすごさに驚かされた。

「なんなんだ……アイツ……あんなに強かったのか……」

赤城は思わず手に持っていた赤く光るエンペラーもバイルを手から落としてしまった。

「……ウグルウウウ……そんな攻撃では俺は死なん……」

爆煙のなかから恐竜の化石はゆっくりと現れた。

「まだ生きていたのか……」

デイバイガンは恐竜の化石を見て静かに構える。

「ウグオオオオ爆熱ブレエス!!!」

突如恐竜の化石の口から物凄い勢いで炎が吐き出された。

「な……グアアアアア……」

デイバイガンは高熱の炎に包まれ苦しそうな呻き声を出す。

（負けるわけにはいかない……こんな所で負けてはいけない!!!）

勝はカイザーもバイルを開く「DLIBAI GANE A b r i
n g i n g s u r e d e a t h m o d e c o r d 5 6 9」
の文字が書かれている。

「コード569!」

勝は素早くコードを入力するとカイザーもバイルを差し込んだ。

「必殺モード確認!!!」

ディバイガンの体が金色に輝き角が4本に分かれる。

「破滅剣!!!エボリユーシヨオン!!!」

破滅剣は形を変えて剛・破滅剣へとなる。それをディバイガンはしっかりと握る。

「炎を消し飛ばすんだ!ディバイガン!!!」

「了解!!!」

ディバイガンは剛破滅剣を勢い良く振り回した。するとその風圧で炎は消された。

「な.....なんだとお?!!」

恐竜の化石は驚いたように声を出す。

「お前は不死身なら一撃で消し飛ばしてやる!!!超神斬・剛王・破滅剣!!!!」

剛・破滅剣は青く光り始め天に伸びる。

「ウグルオオオオオオオ！貴様に負けるものかあ！！」

恐竜の化石は無数の火の玉を吐き出す。

「そんなものは効かない！！喰らえ！悲しき者達の魂の一撃を！龍牙神髓縦一文字斬り！！！！」

超神斬・剛王・破滅剣の長い刀身は火の玉もろとも恐竜の化石とともに一刀両断された。

「そんな・・・・・・コノ俺がウアアアアアア・・・・・・」

爆発とともに恐竜の化石は粉々になった。ディバイガンはいつもどおり魂たちを胸の称号にしまい込んだ。

「・・・・・・ディバイガン・・・・・・今までごめん・・・・・・今度からちゃんと頑張るよ・・・・・・地球のために」

ディバイガンはその言葉を聞くと笑ったように「頼むぞ」と答えた。

少年天下勝は再び決心を固めた。宇宙を絶望のどん底に落とし込むバッダーズと戦うことを・・・・・・

最終話 プロローグ

いつもと変わらない日であった。

彼、天下勝の周りには多くの仲間たちがいた。彼はその仲間たちと共に多くの困難を乗り越えてきた。

地球の平和を乱そうとする彼らに敵対するバッダーズ。

そして宇宙連合の持つ破滅勇者の謎。

そして紀香に隠された秘密。

すべてが重なり合うとき、君は真実を目の当たりにするであろう。

破滅勇者ディバイガンFIN

【次回作品予告】

決心をつけた勇者天下勝。そしてそんな彼を支える破滅勇者隊のデ
イバイガン、デメルス、スーパージャック、ソードキング、ガーデ
イアンクイーン、ストライドエース。

それをあざ笑うかのように地球を破滅へ導く準備を着々と進めるバ
ッダーズ。

彼らの戦いはまだ序章が開けただけであつた。

『破滅勇者デイバイガン』second season』

戦え！天下勝！

【お詫び】

毎度いつも我が拙作『破滅勇者デイバイガン』を読んでいただきありがとうございます。

さて今回の事なのですが、実は僕学生でして今年が受験なわけなので小説の更新がとても苦しい状況になってしまいました。

なのでちょうど区切りが良い第8話を破滅勇者デイバイガンの最終話として、私の生活がだいぶん楽しくなり次第次回作『破滅勇者デイバイガン』second season』を執筆したいと思っております。

では皆さんまたいつか会いましょう！

20

07・7・04 マルスマン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5705b/>

破滅勇者 ディバイガン

2010年10月13日05時06分発行